
紺碧の死神

零光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紺碧の死神

【Nコード】

N6735B

【作者名】

零光

【あらすじ】

ごく普通の男子高校生雄二の前に突如現れた紺色の髪の少女、何やら自分は死神だとか。彼女の話だと雄二は聖人とか言うやつらに狙われているらしく……。

1：紺碧の少女

明日から高校生活も最終学年。

毎年桜が咲く時期になると学校内でも最上級生がいなくなり新入生が入ってくる。

いまじゃ自分が最上級学年。

とは言え学校なんてものは

朝、暖かい布団に別れを告げて通学路へ。

学校についた後は聞き流すように授業を受ける。

そして、家に帰り何をするでもなく夕食、就寝。

このサイクル。

今日も何もせずただ家でゴロゴロして終了。

あとは暖かい布団の中で明日を待つ。

「明日から三年か」。授業ついていけねえよなあ」

そんな独り言を洩らしベッドへ。

ふと気がつくと俺は高層ビルに囲まれた交差点のど真ん中に立っていた。

囲まれるというか俺を中心に円を描くようにビルが建っている。

しかも空は紫色だし、パジャマ姿だった俺は制服姿。

いや、そんな冷静に言ってる場合じゃない。

ここはどこだ？ 大体なんでこんな所にいるんだ？

実は俺は夢遊病で幻覚を見ているのか？

いや、たぶん……違うよな。

で、マジどこなんだよ！？

俺はとりあえず考えてみた。

今の状況について。

俺は寝た。うん、確かに寝た。パジャマも間違いなく着た……。

こう思い出してみても自分に不備が見当たらないのは確かだ。

考えてもしようがない。

かといって何をすればいいんだ。

ほら、上空から天使が二人……っ！？

……紫のフィルターがかかったような空から舞い降りてきた二人の天使は優しく俺に微笑みかけてきた。

つまりどうか？

俺は寝ながら死んだ。

いやいや、ちよつと待てよ。

なんでそんな唐突に死ななきゃいけないんだよ？

俺は健康そのものだったぞ？

そう思っただけでも天使は俺の肩に舞い降りて服をつかみ、その体からは想像も出来ないような力で俺を上空へと運んでいく。

足が宙を浮くころには正直どうでも良くなってきた。

意識すら確かじゃなくなってきたころ、一瞬の突風と一筋の閃光が俺の意識を再び現実に取り戻した。

一気に俺の体へ重力が襲い掛かり地面へと急降下。

それもよりによって顔が下。このままじゃ地面に顔面直撃。

つてか俺をつかんだ天使はどうなった？

いやいやいや、まじ顔面っ！

地面の交差点の白線がくつきり見え出した頃、目の前に一瞬で黒い物体が現れ、掴まれた。……というか、抱かれた？

なんだか人間っぽい感触に抱えられたまま俺は再び地面に足をつけた。

というか、俺は今何をやってるんだ？ どうなってるんだ？

そして目の前には紺色の髪をなびかせ俺を抱きかかえている少女がいる。

「大丈夫かなあ？ 記憶媒体にしては珍しい容量持ってるね」

はい？

きおく……ばんかい？

何のことですか？

「ん〜まあ説明は後で。今ちやちやつと聖人倒しちゃうね」

黒いマントに身を包んだその少女の背は小柄で俺より20センチくらいは小さいと思う。

綺麗な顔立ちからは想像できないような力強さを感じられ、その細くて片手で折ることが出来そうな腕に抱かれていた俺は目を疑った。その手に持っている2メートルくらいありそうな鎌と背中から生えているであろう漆黒の翼。

服から生えてる……って事はないよな。

地面に降り立つと俺の体を割れ物を扱うかのようにゆっくり地面に置き、その綺麗なというよりも可愛い顔が俺の事を見つめていた。

いやいや、俺は今どうなっているんですか？

「息、ちよつとの間止めててね。お願いっ」

その声は10代半ばの少女の声そのもので透き通っていながらもどこか芯のある聞き取りやすい声だった。

とりあえず俺は吸えるだけの息を吸い、口を押さえる。

これがなんの役に立つのかは一切分からないが。

彼女は俺が息を止めたのを確認するとにこりと微笑み一瞬消えた。
かと思うともう俺の前に立っている。

「あ、もう息はして良いですよ」

また微笑んだ彼女の顔は実に可愛らしくてその手に持った鎌と背中
の羽が気にならなくなるほどだった。
ところで……何をしたんですか？

「聖人二体、蹴散らしてきました。ほらそこに」

彼女の指差す方向にはさっき俺の肩を掴んでた天使が二匹。
灰色の石のように転がっている。

「うーん、意味分らないよね？ まあとりあえず時間軸戻すから
待ってね」

上空に鎌をかざし、日本語ではないであろう言葉を呟いたかとおも
うと、俺は一瞬で布団の中にいた。

「何だっただよ。夢か？」

「あのですね」

うおっ、横にいた！？

ここは間違いなく俺の部屋。

その少女は黒いマント姿から普通の女子高生の私服姿へと一変して
いた。

しかもちゃっかり机のいすに座ってる。

啞然として声すら出ない。

そりゃそうだろ？

変な夢を見たと思ったらその夢の中の少女が目の前に、というか俺の部屋にいる。

「あ、ごめんなさい。この席は特別席とかだったりしましたか？」

いや、その前に理解不能なんですが。あ、席はそこでいいですが。

「良かったあ。この席座りやすいし。あ、どこから説明します？」

どこからって、順序はどうでもいいのでとりあえず全部教えていた
だきたいものです。少なくともあなたは誰ですか？

「私はルウ。ルウ・アーク・ブルーグローブです。職業は死神です」

し……死神？

そういえば翼と鎌はどこに？
というか、死神いつ！？

「あは、その反応は予測済みです。でもちよつと名前にも反応して
ほしかったなあ。あ、翼と鎌は収納可能です。だって邪魔でしょ？」

「

あ、名前ですか。えっと……るうあくぶるんねず？

「もう、ルウでいいですよ。とりあえず説明していきますね。あな
たがあの世界に迷い込んだのはあなたが特別だからです。それは後
でまとめますね。あの聖人、あなたから見れば天使と呼びますよね。
あれはあなたのような特別な人材をあの世界に呼び込み自分の世界

へと連れて行く。死への案内人って感じですね」

天使がですか？ 天使ですよ？ 天使。

「はい。天使ですね。人間から見れば天使は良いイメージばかりだと思います。だけど本当は違う。天使は優れた人材をどんどん自分の世界へと連れ込みやがては世界を我が物にしようとしています。それを止めようとしているのが私たち、死神です」

ちょっと待てよ、これは鵜呑みにして良いのか？

こんなかわいい顔して実は悪役なんてオチじゃないよな？

「疑われてますかね？ 私もこれが初任務なんで実は自信ないんですけど」

うーん、悪役に見えない。

人を見かけで判断しちゃいけないって言うのは分かってるが、死神はどうなんだろうな。

「とりあえず続けますね。あなたが特別なのはあなたの記憶媒体としての容量です。記憶媒体というのはメモリーカードみたいなものです。人間にはひとりひとり容量が割り振られていて天使、私たちが言う聖人は容量が多い人間を好みます。そしてあなたの容量は他の人の数倍、数十倍はあるということです」

容量……パソコンで言うギガバイトとかそんなやつだろ？

「お、知ってますね。良かった良かった。一応ギガなんて数値の数億倍ですけど」

まあ人間の容量がパソコンに負けちゃいけないよなあ。
って、そんなのんきに話してられる状況か？

「確かにそうですね。あ、ちなみに息を止めてもらったのは彼らが記憶媒体の書き換えを感じ取って近づいてくるからです。呼吸というのは書き換えが多いですから」

はあ。

俺はとりあえず自分の部屋を見回し何か異変がないかと思ったが、彼女が座っていること以外は異変なし。

布団は暖かい。

パジャマは着ている。

さつき着ていた制服はハンガーにかけてある。

で、彼女は椅子に座っている。

「そんなに見回しても異変はないですよ。あ、私ですか？ どうぞルウなりなんなりお呼びくださいね」

そういう意味ではなくて……。

「そついえばあなたの名前は何ですか？」

あ、俺の名前？

そついえばまだ名乗ってなかったな。

その少女の微笑ましい笑みを見ていると何か心が落ち着いた。

少なくとも今はこんな話でも聞いていてもいいような、そんな気持ちに。

「俺は雄二^{おにい}。松野 雄二」

「そっかそっか。じゃあゆづくんだ。まあ短い付き合いになると思
うけどよろしくね」

ゆづく……親と同じ呼び方だな、おい。

結局。

これが俺の人生を変える最初の一步だったと知るのは少し後のこと
になる。

2：聖と死

昨日は散々だった。

何がつて、分かるだろうがいきなり変な夢、そして天使……聖人だっけか？ それとルウと名乗る死神。

あの後ルウは用意があると言ってどこかへ行ってしまった。

俺は結局一睡もしていないので意識朦朧いしきもうろうの中、いしきもうろう 渋谷高校へ。

昨日夢でも着ていた制服を着て歩く通学路には春の風が吹き抜けている。

「よお！」

見慣れた姿が目の前にいる。

中学からの腐れ縁でここまで一緒に来たが、じゅん なんだかんだで一番の友である純。

「どおした？ お前寝たかあ？」

お察しの通り寝てません。いや、あの出来事までは寝てたか。

「なあ、お前天使と死神だったらどっちが味方だと思う？」

どうせだから想いをぶつけてみる。

まあ、話題にでもなるだろう。

「は？ ……お前は熱がある。きつとあるぞ。天使と死神って天使のほうがいいだろ？ フツー」

だよな。

新しい気分で待ち受ける事も特になく、今まで見慣れたクラスメイトに俺は迎えられた。

そして担任の岡田がいつも通り暑苦しい顔で入ってきた。

「ほらほら、席つけ。いいから席つけ！！今日は重要な発表するぞ」

重要ねえ。

今までの経緯からだが岡田のいう重要は大した事無い。

高1から今までで一番重要だったのは学食のメニューが増えたことぐらいだ。

「ほら黙れっ。あゝ転校生だぞ。転校生」

何っ？

転校生といえばある意味で一大イベントだ。

このクラスの活力剤になるかもしれない。

周りが騒がしくなりだし、いよいよその転校生が教室のドアを静かに開ける。

その少女は紺色の髪をなびかせ微笑みながら教室に入ってきた。

昨日、ビルに囲まれた空間で落下していた俺を抱きかかえて助けてくれた少女。

もう名前も知ってる。

「はじめまして。松野 ルウです。よろしく願いします」

……ちょ、松野って。

俺と同じかよ。

いやそれより、なんでここにいて制服を着ていて転校生なんだ？

「お前と苗字一緒だな。で、お前も啞然としすぎ」

横の席にいる純に指摘されないでも自分の表情は十分わかっていたが、とにかく啞然としてしまった。

だって、当たり前だろ？ この状況下で。

一方のルウのほうもクラスの女子からいろいろな質問を手当たり次第にふられ、早くも人気者ムードだ。

「あゝとりあえず席は松野…… ってもどっちも松野か。松野雄二の後ろで。あそこで呆然としてるやつな」

俺のほうを岡田が指差すとルウはこれまたにつこりと俺に微笑み、ゆっくりこっちへと歩いてくる。

俺は周りから見ればその歩く姿に見とれてうつとりしてしまっている青少年に見えたかもしれないが実際のところは頭の中でクエスチヨンマークがびっしり詰まった理解できない子状態だ。

何か純が言っていたかもしれないが全く耳に入らなかった。

俺の第一声はもちろん

「なんでここに？」

俺の後ろに都合よくあいていた机に腰掛けたルウに小声で話しかける。

そのルウは首を20度くらい傾けてこれまた小言で

「ゆうくんを守るのが使命ですから。近くにいたほうが楽かなと。あ、私本当に17歳ですし」

俺を守ってくれるというのは確かにありがたい。あんな天使に夜な夜な起こされて上へ運ばれていくというのも気分がいいものではない。

まだ死にたくはないしな。

かといって、こういう理由をつけて死神が日本のごく普通の高校に入ってこれたんだ？

「その辺は私の上層部の人たちが、まあ俗に言うボスですね。そのボスがどうにかしてくれたみたいです。その通知が来たのもほんの20分前ですし」

どういう機関だよ、全く。

で、これは私情だが昨日の空間での黒いマント姿のルウ、その後俺の部屋での私服姿、そして今の制服姿。こういうのも何だが全て似合っている。

何かの雑誌の専属モデルにも対抗馬として出せるぞこれは。

いや、それどころじゃないな。

で、一体俺は何を……

「こら松野！ あゝ雄二！ 転校生がうれしいのは十分分かるが今の話聞いてたか？」

岡田に話をぶった切られ、話などもちろん一言も耳に入っていないなかったわけ。

結局ルウは小さな紙切れに可愛らしい文字で、また夜にでもお部屋にお邪魔させてもらいます、と書いて俺に渡してくれた。

その後ルウはクラスの奴らに再び尋問にあい、どこから来たのかとかどこに住んでるのかとか聞かれていた。

「なあなあ、あの子むっちゃくつちゃに可愛いよな。いやあこれはやばいぞ」

そうはしゃぎながら俺に近づいてきたのは純と同様腐れ縁の裕樹。^{ひろき}俺たちはヒロって呼んでるけど。

こいつはこんなテンションを維持することができるという、ある意味特殊能力を持っている。

まあ可愛いというのは認めるが。

「でも、苗字が同じお前ときたら……」

なんでそこで俺が比較対象になってるんだ？

いや、苗字が一緒ってか。

本当はルウ……あくぶるねんずだかなんだかっていう横文字の名前があんだけどな。

そーいやルウって部分は偽名使わなかったんだな。ハーフか？

「まあ、どうせ俺はぎりぎり進学できたような出来損ないですよっだ」

それだけ言い捨て俺は自分の世界に戻った。

いつも通りのパターンだけど。

この日は特に大きな行事はないのでそのまま学校は終わり。まあ俺からすれば行事はむしろこの後なんだが。

ルウはもう教室にはいなかったたので先に帰ったのだろうか？

トイレになんか行ってる場合じゃなかった。

ってか、どこに帰ってるんだ？

とりあえず今日はお楽しみムードでは無いので純の誘いもヒロの意味不明の勧誘も丁重に断り家へと一直線。
家に帰る間、頭の中で今までの経緯を追ってみたけど、分かんないなあ……。

とりあえず今日の夜来るんだっけか？

まあ一回助けてもらったし信じないことも出来ないけど。

家に着いて自分の部屋に入ると一気に緊張感が抜けた。

見慣れた空間というのはどうしても緊張感が緩んでしまう。

俺は机の椅子に手をかけ昨日のことを振り返っていた。

昨日ルウはここに座ってたんだよな。

とりあえずバックを置きベッドへと腰をかけた。

「ふんぎゃあ！！！！？」
「」

俺が座ったベッドはもともと柔らかいがそこに柔らかい何かが入っていた。

思わず立ち上がり布団を剥ぐとそこにはルウがいた。

制服姿ではなく昨日と同じ私服姿で。

こうやって見るとやっぱり可愛いな。

いいや、それどころじゃないんだった。

夜に来るんじゃないっけか？

「あ、いや、実は昨日は公園で寝てみたんだけど切ないし寒いしわんちゃんに絡まれるし……」

公園ってさあ、例の機関の上層部の奴らが住まいを用意してくれるとかそういうのは無い訳？

つか昨日は何の準備を？

「私はお料理できないから住まいを貰っても飢え死にしそうで、はは。で、公園の土管で寝ようって意気込んでみたら土管は無いし……」

土管かよ。

それに飢え死にって、何か多少考えがずれてるような？
コンビニとか行けば良いのに。

「へへへ、お金ないし。あ、昨日の準備って言うのは相手の情報調査」

なんか上層部の人がどうにかしてくれそうだけどなあ。

まあ、してくれなかったからこうなってるんだろってけど。

「それで、昨日ゆうくんがこの中で幸せそうな顔してたからついっ
い確かめたかったんです。ごめんなさい……」

しゅんとしたルウは迷子の子犬のように見えた。

というか可愛すぎますが。

ヒロの言ったことに同感。

「そんな謝らなくてもいいんですけど。というか、まずどうやってここに？」

もちろん家に鍵はかかっていた。

両親は仕事だし、俺が帰ってきたときも鍵はかかっていた。

が、彼女は俺のベッドでのんびり寝ていた。

……もしかすると

「ベランダからです。ガラス二枚で仕切られてましたけどちょちょいのちょいっ」と

大体予想はついたけど。

しかしベランダを見ても破壊されたような跡はないし、ピッキングもされてなさそうだし、彼女には出来無そうだ。見た感じ。

「そんな物理破壊はしませんよ。物騒な。え〜っですわねえ……時空軸をxとしてこのガラスをyとするとこのガラスをすり抜けるのに必要な速度は29847154√7キロで……」

その後も俺にはさっぱり理解不能な数式が並べられていったが、理解できたのは彼女はガラスをすり抜けて入ってきたんだということだ。

まあ死神なんだしすり抜けとかが出来てもおかしくないか。

「でもすごい気持ちいいですね〜ここ。ついうとうと……」

まあ俺愛用のベッドですから。
いや、そうじゃなくて。

「あ、じゃあ本題に入りますね。まずあなたを狙ってるのはこの前の天使のボス。まあこの辺は予想通りですよね。私が実はゆうくんを狙ってるなんてオチは無いですから」

分かってますって。むしろここで実は私が敵でしたなんて言われても驚きは薄いかもしれない。

「良かった〜。少しは信頼してくれたかな？　で、なんでゆうくんを狙ってるのかって言うのは」

「俺の容量とやらが多いつてことなんだろ」

俺が自分自身で理解できたのはこの程度だったが。

とりあえず俺が特別なのは他の人よりちよつとばかり容量が大きくていっぱいデータが入るって事なんだろ。

「そうです！ よく出来ましたぁ」

そう言つとルウは俺の頭をくるくる撫で回してきた。

俺って子ども扱い？

確か同じ年なんだよな？

「私はれっきとした17歳の女の子ですよ」

死神のな。

そついえば昨日の鎌や翼とかはどこにしまつんだ？

あと学校のバックと制服や私服とか。

「翼は体内ですね。飛ばうと思えば出るし、しまおうと思えばしまえますよ。他の持ち物は全部ここに」

そついうと彼女は自分の右腕のブレスレットに指を当てとつさに声を出した。

「制服っ！」

そついうとブレスレットについている彼女の髪の色のような紺色の宝玉から制服が地面にぼとぼと出てきた。
便利だなぁ。

「この腕輪もメモリーカードのようになっていて私の持ち物をデータ化して収納できるんです。もちろん容量に限界はあって今でも結構ぎりぎりなんですよね」

なんだか容量って言葉を良く聞くなあ。

「私のお気に入りです」

につこり笑っている彼女は どう見ても死神には見えない。

そりゃ確かに翼が生えているところも見だし、自分より大きな鎌を振るって天使を一瞬で倒してしまうほど強いのも分かってはいる。それでも目の前にいる少女にはその面影は無くごく普通の美少女にしか見えない。

「さてそろそろ本題に戻ろうかな。その天使はゆうくんを狙っている。何のためかは分からないけどいいことは無いと思うの」

そりゃごもつともだ。

あのまま天国に運ばれていたら今頃は天使のメモリーカード扱いだろうしな。

「それで私の役目はゆうくんを近くで護衛して1ヶ月守り抜くこと」

1ヶ月？

期間付きですか？

「そうなんですよ。私にもさっき上層部から連絡があったばかりなんですけど、聖人側の拠点はもう20日ともたないようです。今まで私たち死神側と戦争を繰り返していた天使側は圧倒的不利な状況

に置かれてきました。私が生まれたときにはすでに戦争は始まっていたし」

天使対死神か。

これも俺が知っている常識範囲では天使が勝ってハッピーエンドなんだけどな。

死神が有利ってことはこれも逆か。

「その戦争がもうすぐ鎮圧できそうなんですが、天使側が自分の拠点の容量を増やそうと人間を捕まえ最後の抵抗に出ているところですよ」

ずいぶんと物騒な話だな。

というかこんなファンタジー物語が俺たちの知らない所で展開されているとはな。

ってかそれだったら俺を捕まえたいのはその容量の足しにってことでいいんじゃない？

「そうなんですけど……天使側は他の人間の捕獲行動への労力をあなたの搜索、捕獲に割り当てているんです。何かおかしいと思いませんか？」

と、言われても……。

そこまで俺には価値があるのか？

「確かにあなたは普通の人より容量は大きいですが、でもそれなら他にもたくさんいる人間を何人も捕まえただろうが効率もいいし容量も貯まるはず。あ、もちろんそんな事させませんけどね」

天使側が俺を狙っている理由。

容量が大きいだけで俺を狙っているだけじゃない？

「つても俺は普通に日本に生まれて普通に今まで過ごしてきただけだぞ？」

容量が普通の人より多いってだけでも疑わしいってのにまだ何かあるのか？

「それはまだ分からないんですけどね。とにかく、私の役目は1ヶ月ゆつくんを守ること。本当は鎮圧が終わる20日間でもいいみたいなんですけど、念のために」

まあそれなら俺は何もしないで1ヶ月過ごしてりや安全ってことか。

「そうなんですよ、だから屍しかばねに乗ったつもりで安心していてくださいね」

安心していいのか？

そつえば……

「昨日みたいにまた寝たら天使に連れていかれるなんてことは」

「あれはたまたま時間帯が重なっただけですから寝てるとかは関係ないんです。残念ながらいつ相手が現れるかまでは分からないんですけど」

それって安心じゃない気がするんですけど。

「大丈夫大丈夫！　もし寝てる間に襲ってきても私は戦えるから！

」

そのときは俺も起こされるような運命ってか。

寝不足覚悟の1ヶ月だな。

そういえば昨日のあの空間ってどこなんだ？

あんなビルが円形に密集している空間は日本には無いだろうし。

「あれは少し時空軸がずれた空間で……亜空間とも呼びましようか。天使と悪魔が住んでいる空間の延長線ってかんじですね。私も作り出せますけど、その性質はさまざまです」

そこに俺は拉致されたのかよ。

だんだん外も暗くなり始めた。

夕日が眩しいなんて物思いにふけていた頃も……あったっけか？
そして俺はその時刻からあることを思い出した。

「たっだいまあゝ！ ゆうくゝん？ 今日ハカレー作るよゝ！！」

見事なタイミングで親が帰ってきた。

どうしよつか。どうする？ どうするべきだ？

俺が咄嗟にルウの方を向くと彼女はベッドの下に隠れていた。

なんとまあ動きの早いこと。

そうしているうちに階段を上ってくる親の足音が大きくなりドアのノック音が鳴った。

「おかえりなさい！」

ドアがあつた場所にいる俺の母はどこか天然ボケが入っている。

そしてその母の姿を見た後に母と俺の視線は同じ場所に集まった。
しまった。

そこにはさっきルウが腕輪からぼとぼと出した女子生徒用の制服

が落ちていた。

なんですぐに気づかなかったんだろうか。
というかどうかいい訳がもつとも的確なのか。

「あれ？ ゆうくんって女装の趣味あったっけ？」

じょ……

「それは無い！ これは」

落ち着け俺。落ち着け。

「あ、お母さん？ カレーは……」

そう言うとき母の目は自然と制服から俺に向く。

地面に落ちている制服を出来る限りの反射速度でベッドの下へ蹴る。
これは完璧な……

「ふにゃ！？」

またも失敗した。

ベッドの下には制服の持ち主が潜り込んでいた。
そこにいきなり制服を蹴りこんで驚いた声だろう。
これには母も……。

「カレーはふにゃ？ 何それ」

って、俺が発したと思ってるし！？

「かつ、カレーはふにゃふにゃな米より少し硬めのほうがいいよね

？
」

なんか語呂合わせみたいだったがこれが案外うまくいき、何も言わずに母は微笑みながら出て行った。

ここで追求されたら何て言っただろうか。
危ないっいたらありやしない。

ドアが閉まったことを確認し、俺はすぐにベッドの下を覗いた。
そこには口に手を当ててうずくまっている少女がいた。
母が天然で良かった。

「もう大丈夫。親はもう階段下りて下の階にいるから」

そう言うところは一瞬でベッドの下から出てきた。

あまりに一瞬だったので焦ったが。

「うう。ごめんなさい。女装が趣味だと勘違いされちゃったみたいで」

まああの人はそう深くは気にしない人だから別にいいけど。
まあ制服に気づかなかったのは俺にも落ち度はあったが。

「あ、じゃあ私はそろそろ……」

「また公園？」

そついうとルウは驚いたような顔をして

「なんで分かったんですか？　うって言っても分かるか。はは」

そりやまあ。

さつき行き先が無いことは聞いたし。

「まあ良かったらここにいてもいいんだけど」

別に深い意味を考えないでそう言ったんだが途端にルウの顔が赤くなり、ひいっと小声をあげた。

「ここにつて……そんな駄目ですよ！ そんな恥ずか……」

あ、いや、そんな深い意味では。

「とにかく一旦出ますね。ちゃんと守りますから安心して下さい。では」

そう言うで一瞬で彼女の背中に黒い羽が現れ次の瞬間には風が俺の横を横切って行った。

今もさつきの難しい数式の原理でガラスを通り抜けたんだろうか。

「ふう、俺も大変なことになってるよな」

ルウがいなくなったことで緊張感が解けた俺は夕食を食べた後すぐにベッドに入り、次の日を待った。

3：舞い降りた聖人

目覚ましの音で目が覚める。

布団の中は暖かく、出たくないという衝動に駆られるがそこを耐えなければ寝坊だ。抱き枕なんかに……

抱き枕？

うつすらと目を開けて見るとそこには見たことのある小柄な体、紺色の髪の少女が横たわっていた。

その姿は今まで見てきた少女をより一層輝かしく見せ、その細くて白い腕が俺の服を優しくつかんでいた。

「ふええああああ？」

何か奇怪な声を上げてしまったが親はもう働きに出ているので安心だ。

いや、安心じゃないな。

「ん……あ、おはようございま……すっ？」

起きた。

目をこすりながら俺を見ている。

これで鳥だったら刷り込みとやらが発生しているのか。じゃなくて。

「えっ？ ええ？ 嘘？」

慌てているが、俺も十分焦ったぞ。

昨日確か出て行ったはず。

「あつ、そういえば昨日公園に行ったんだけどおじさん達がいつぱいいたからベランダだけでも借りようかなと思ってベランダまで来たんだけどゆうくんの寝顔があまりにも気持ちよさそうで……」

それで入ってきたっけ。

なら最初からいてくれてもいいのに。俺は下に寝るし。

「でも悪いですよ。あ、それに制服置いて行っちゃったんですけどね」

そう言うところウはベッドの下に潜り込み制服を持って出てきた。そういえば昨日そのままだっけ。

あれ？

「そういえば何か食べてる？ 昨日もお金ないって言ってたから何も買っていないじゃ？」

そう言った時にタイミングよくルウのお腹から音がした。
うん。食べてないな。

「むぐむぐ……これおいしい！ わぁ！」

リビングに置いてあったパンをおいしそうに食べているルウは驚くような食欲を見せていた。

そんなにお腹すいてたのか。というか死神でも腹は減るのか。

「さてと、そろそろ学校行かなきゃ遅刻するし行こうか」

ルウが食べ終わり着替えている間に俺は朝の一連の行動を終え制服に着替えた。

今日から授業が始まるっていうのが憎らしい。

登校中に女子と二人で歩くというのはなかなか無い機会で周りから見れば俺たちも立派なあれなんだろうか。

「やっぱり飛んじゃ駄目ですよ〜」

ルウは苦笑いしながらそんなことを言ってるが、そりゃ見つかったら大変だろ。

新聞の記事も大いに賑わうぞ。

教室に入るとき同じタイミングではいると何か言われる可能性があるという配慮から俺たちはタイミングをずらして教室に入った。
先にルウ、後で俺が。

「おつす、雄二。今日からまた学校だなあ」

純が苦笑いしながら話しかけてきた。

ちなみに昨日も学校だ。

「なあなああのルウって子さあ、ハーフだよな？ あんなに可愛いんだもん」

ヒロが俺の背後にいた。

教室の中でこいつの気配はどうにも感じにくい。

ついでに言つとルウは死神だ。ハーフかもしれないが。

そんなことを思っている間ルウはクラスの女子と仲良く話している。

確かにこう見ると普通の高校生だよな。

ハーフと言えはこのクラスには正真正銘ハーフがいた。

ポーラ・結^{ゆい}。

病弱で休みがち。が、か弱いイメージと裏腹に成績優秀、スポーツ万能な優等生。

一体どこで勉強してんだか。

「よっ！ 昨日からなあんか浮かない顔だねえ、元気だしなよっ！ そりゃ勉強は私も嫌だけどさ」

背中に重い鉛球のような平手打ちを喰らい、これもいつもの事だなあと感じた。

もちろんこんな事をしてくるのもクラスに一人。

「恵美^{めぐみ}は元気ありすぎて余ってるよな。少し分ける。俺に」

いつでも元気が取り柄の小林 恵美は明るく誰とでも仲良くできるタイプで、クラス内でも人気がある。

まあ平手打ちの威力もそれ相応な物だ。

「雄二は時たま自分の世界に入り込んでぼーっとしてるからな。何考えてんだか」

お前だってぼーっとしてる時はするだろ。

人間誰しもぼーっとする時間は必要なんだ。多分。

「おっと、次英語じゃん。さ、準備準備」

恵美がそういうと同時に時間割を見た。

英語？

月曜の一時間目って古典じゃ？
その時俺は気がついた。3年になったんだから時間割りだって変わると言う事を。

英語と言う物は俺の中でワースト3にはいる教科だ。
俺は日本人だ。日本語が話せりやそれでいい。

……そんな考えが甘いんだろうな。

「じゃあここ松野！」

しまった。不意打ちだ。
どこだよ。どこ。
ん？ どちらの松野だ？

「お？ なんだ転校生も松野か。じゃあせつかくだし、ルウさんに読んでもらおうかな。12ページの2段落目」

俺のときもページを教える。

……そういえばルウって勉強できるのか？
年は同じって言ってたけど死神の世界に学校は？
しかしその答えはすぐに出ることになる。

「これは英語ですよ？ えつと…… Do you live in a house or ……」

俺の後ろで教科書の文章を読んでいるその少女はまるで外人のような発音で文を読み上げている。
はつきり言うが先生より発音はいいし、声もきれいだ。

そんな存在感を見せたルウはその後国語 / 数学 / 物理と昼休みま

での授業全てを完璧に済ました。

おいおい。死神つてのは頭もいいのか。
とりあえず後ろにいる本人に聞くのが一番早いんだが。

「全部完璧じゃん」

「そんなこと無いよ。たまたま」

たまたまでそこまで出来るんだったら俺にもそのたまたまの神が舞い降りて欲しい物だ。

俺は今日の授業全て大敗さ。

結局放課後までの残り2教科も完璧にこなしまさにパーフェクトぶりをクラスに大胆アピールしたルウの株は急上昇。

勉強教えてだのと言った理由でルウの周りには小さな人ばかりが出来ていた。

これでルウが死神だなんて知ったらどんな反応するんだろうな。

「来る」

突然ルウがそう言うとかラス内は一瞬にして紫色のフィルターがかかったような色になり、純もヒロも恵美もみんな消えていた。
残っているのは俺とルウだけ。

「って、おい。いきなりかよ」

そうは言っても相手は待つてくれないってか。

「相手はどうせ下級兵だよ。大丈夫」

こんな小柄な女の子に守られているのも何か落ち着かないが今はそれどころじゃない。

教室の蛍光灯が割れる音がして俺は地面に伏せた。

窓の外は一面紫で何も見えない。

と、言うよりも何も無い。

ガラスそのものが紫に塗られたような空間。

そして上を見ると蛍光灯があつた天井には4メートルくらいの穴が開きそこから天使が降りて来た。

でもこの前とは違う。

やさしそうな顔などせずにその顔はまるで悪魔の申し子。

これが聖人……。

「たあつ！」

見るとそこにはブレスレットから鎌を取り出し、翼の生えたルウがいた。

その姿は改めてみるとコスプレでもなんでもない本物の死神を思わせるようだった。

ルウの紺色の髪が風になびき、聖人へとその鎌を向け飛んでいく。

その細い腕に握られている鎌が突如音を立てる。

鎌の描く円形の閃光が聖人の体を貫き、黄色い粒が落ちてきた。

そこに響いたのは聖人の喚き声と鎌が放った空気を切る音。

ほんの一瞬だった。

「はい、おしまい。大丈夫？」

軽そうな音をたて足を地面へ着けたルウは先ほどまでの戦闘が無かつたかのように涼しい顔をしている。

凄く可愛いのだろうが今はそんな事に気を向けていられるような状況じゃない。

「凄いな、一撃……かよ」

教室の天井に先ほどのような穴は無く、机と机の間に聖人が一体斬られて転がっている。

血が出てるわけでもなく元からそのような形だったかのように。

「私これでも死神界では伝説の血を受け継ぎし紺碧こんぺきのルウって呼ばれるくらい凄いですよ？ あっちではルウとも紺碧とも呼ばれません」

なるほど。

つまり今回の件はその紺碧が動くくらい重要なことだってことか。

「はい。上層部からゆうくんは何が何でも守れといわれていますので」

守られるのは嬉しいが、あんな聖人が襲ってくるたびに俺は地面に伏せていなきやいけないのか。

いつそ戦うか？ いや、止めとこつ。多分足手まといだ。

「大丈夫ですよ、私が全力で守ります」

全力でお願いします。

「じゃあ元の空間に帰りますね。あ、上層部から報告も来たのでまた後でお話します」

そう言うところルウは鎌をブレスレットにしまい、床に人差し指を当てるとどこかでガラスの割れるような音がして俺はクラスに戻った。

ルウは何事も無かったかのようにさつきまでと同じ場所で話しているし、俺も知らぬうちに椅子に座っている。

「こいつらは何も知らないし見てないのか」

純もヒロも恵美も、クラスの皆が今の状況を見ていない。

そりゃ皆いなかったんだが、消えている間時間が止まってたってでも言うのか？

はあ、頭がついていかねえ。

「さつきから何一人で呟いてるんだか」

純とヒロに心配されるが、それどころじゃない。

俺はお前らより容量が多いんだぜ。

なんて間違えてでも言ってしまったら俺は保健室あるいは病院に連れて行かれる恐れがある。

参った参った。

「早く普通の生活に戻りてえ」

ぼつりと口から出た小言には誰一人反応しなかった。

4：理解、把握、不安

学校が終わった後は家に帰るのみ。

高校生活は部活をやっているほうが楽しめる。

そんな思いは俺にもあるんだが、なんせ運動音痴な俺は無所属。逃げていただけだな。

文芸部ってタイプじゃないしね。

ちなみに純はサッカー、ヒロは何食わぬ顔で予備校。

恵美は……まあ女子と帰るだろ。

で俺はいつも一人旅気分を味わっていた。

今までは、な。

今はとても家が近い、というか家が同じ同級生がいるのだから。

松野 ルウ。本名はもつともつと長かった気がするが。

苗字も同じで下手すると双子とか言われる可能性も否定できないが、彼女は死神。

俺を聖人とか言う天使もどきから守るためにここにいるのだと言う。で、その彼女も明るい性格が幸いし友達はすぐに出来たのだが、帰る方向は全くの逆方向。

つまり残る相手は俺だけであって。

「じゃ、帰ろ」

そう言っただけで横に立っている少女は死神だと言うことを忘れさせるくらい可愛く、そんな子と一緒に帰る俺は妬みの的になっているかもしれないがそんなの知らん。

俺の家の方角は純、ヒロ、恵美以外に数人しか住んでいないので帰り道で同じ学年はおるか同じ制服を着た生徒ですら極まれにしか見ない。

「さっきは焦ったよ。分かってはいたけど学校でもあいつらは襲ってくるんだな」

空間全体に紫のフィルターが貼られたような空間はお世辞にも居心地がいいとはいえない。

もしルウがいなかったら今頃はあっちの世界だ。

「場所は選びませんから。気配を感じられるのも相手が敵意を表してからなので急なんです」

いつでも敵意むき出してわけでもないのか。

うちの近所の猫は俺に対して24時間敵意むき出しな奴だけど。

「下級兵はそこまで思考が発達していないから分かりやすいんですけど上級まで来ると実際に現れてからじゃないと分からないこともあります」

いい予感がしないな。

俺は見慣れた通学路の景色を見ながらさっきの様子を思い浮かべた。あの聖人は下級らしいけど、上級になるとそれだけ強くなるってことなんだろう。

「私も鍛錬はたくさん積んでいます」

そう笑顔で言ってくれる味方が可愛く、頼もしすぎて緊張も少ないが。

「それで上層部からの連絡内容ですが」

そこまで言って彼女は俯いてしまった。
そんなにマズイ内容だったのだろうか？

「聖人はゆうくんの容量を使って神を作り出そうとしています」

思い切ったような顔をして俺の顔を見ながら放ったその言葉はこんな状況じゃなかったら笑える話だ。

俺を使って神を作る？

というか聖人って存在が天使、イコール神ってもんじゃないのか？

「どちらかと言うとニアリーイコールと言った感じです。聖人は神のようで神じゃない。その定理から行くと私も神って呼んでもらってもいいはずですよ」

実はあまり理解してないが、ついなるほどと口から出てしまった。ニアリーイコールって何だ？

「ゆうくんを使って作ろうとしているのは圧縮されていない神、私たちはユグドラと呼んでいます」

俺を使って神が出来るってか。

容量が多いって言うのは聞いていたけど、しっくりこないな。

「私も驚きました。まさか聖人がそこまでしようとしているなんて」
それほどに神って言うのは凄いですか？いや、そりゃ神なんだし凄くないはずもないんだろうけどさ。

「神が聖人側についてしまうと私たち死神側は一瞬で壊滅しますね。ゆうくんは私を守りますけど」

確かに死神界でも名が知れた紺碧のルウが守ってくれるというんだから安心できそうだ。

今までの戦闘でも危なげなシーンは見てないし。

そうそう、俺には疑問に思っていることがあった。

「俺の容量が多いのは分かりましたけど、それって他の人間を複数人捕まえて容量をその聖人とやらのサーバに集めても同じことなんじゃないでしょうか？」

すると彼女は紺色の髪をさらりと撫で、口元を少し動かしながら

「確かにそうなんですけどそれだと駄目なんです。その方法だと容量の隙間が出来てしまつて神を作り出すことが出来ないんだと上層部の人は判断しています。事実聖人側も他の人へは今のところ動きを見せていない」

確かに無防備な人なんていくらでもいるのにな。

「ところがゆうくんの持つ容量は神を作り出すのには十分な容量を持っているんです。つまり隙間も無い完璧な記憶媒体、それが松野雄二。あなたなんです」

俺ってそこまで凄いのか。

少し自身が持てた。

何の自身か知らないが。

「その代わりいつ聖人側が他の人間を狙うかも分からないんです。サーバの維持には容量は必要ですし、私たちの世界では容量は必需品のような物なので」

容量、ルウから見ればクラスの皆も容量として扱っているのだろうか。

そんなことがふと頭をよぎる。

俺の中ではまだまだ質問が山積みだ。

「えっと、死神の世界のほうは大丈夫なの？　ほら、容量。聖人側はなんか足りないみたいだけど」

聖人側が人間から容量を集めているんなら死神側も集めているんじゃないか。

「んつと、私たちは人間狩りをするんじゃないかって死んだ人間から容量を貰ってるの。酷い言い方だけど、こっちで人が死ねば死ぬほど死神界では容量が増えていい生活が出来る」

なるほど。エネルギーの循環って感じか。

でも少し意外だな。

死神なんて名前がついてるんだからこれこそ人間を捕まえてるんじゃないかと思っただが。

「本当は聖人側もそうしなきゃいけないの。生きている人間を無理矢理変換して自分たちのために使うのは良くない。そういう対立から始まったのが今回の戦争で、あと19日以内に死神側が勝つ。そう予想は出てるけど……」

そこでルウの足が止まり、考え込むような顔をしていた。

ちょうど交差点の信号も赤に変わり俺も足を止める。

目の前を走る車の騒音にかき消されそうな小さな声でルウは続けた。

「少し不安。聖人側はもう崖っぷち、人間界に全精力を向けて容量を取りに来てもおかしくないのに標的は今のところゆうくんだけ。何か作戦があるんじゃない……」

目の前にいるルウは鎌を持ち、翼の生えている死神状態のルウじゃなく普通の女子高生のようで、今にも泣き出しそうな顔をしていた。こういう場合はどうすればいいのか、経験も無いから何とも言えないが黙っているわけにもいかず。

「ルウが不安なんじゃ俺はもっと不安なんだし、頑張ろうぜ」

自分で言うておいて何だがこの状況にしてはよく思いついたぞ。俺。

「ん、そうだね。頑張るぞ〜！」

何かうまくいったようだ。

まあ、ここまでの内容をまとめてみると、俺は普通の人より容量とか言う物が多いらしい。

それで聖人とか言われてる悪者が俺を狙っていてルウは俺を守るためにやってきた死神。

俺を狙っている理由は神を作り出すことで、俺以外の人を何人も捕まえるのじゃ駄目。

神が作られるとまずい。

んでもって、ルウの不安点は聖人が俺以外の人を狙わないのはなぜか。

そついう事か。

ふう、頭が痛くなりそうだなこりゃ。

「私の話分かったかな？」

俺がうんうん言っただけで悩んでいたのだから心配された。

俺にしては随分と理解したほうさ。

このぐらいの理解力が勉強にも活用されてほしい物だが。

「じゃあ任務終了の来月までゆつくんはしっかりお守りします！」

一カ月後か。

それまでに何も無きやこの上なく楽なものな。

通学路を歩き終え、俺の家についたころ

「そつえば本当にお部屋に居座っちゃっていいんですか？」

ルウは少し不安げな表情をしていたが、親にばれなきや別に問題ないという事を伝えるとルウは礼儀正しくお辞儀した。

一体どんな教育を受けてきたのやら。

そついや

「今日授業とかたまたま言ってたけど、こつちの世界のこととか色々よく知ってるよね。やっぱ勉強してる？」

「死神界も似たような物なんです。殺伐とした風景が思い浮かぶかもしれません。家はありますし、水道やガスもあります。ただそれを動かすのに必要なのが容量で、さっきも説明したとおり死んだ人間からいただいています。その変わり死んだ死神は雨になっているんですよ」

まじか。

「マジです。へへ」

微笑んでいるルウを連れて部屋に入るとそこには殺伐とした俺の空間。

下手すると死神界より汚かったりしてな。

「私このベッド好きです……ふにゃ」

ばすんとベッドに倒れこんだルウは猫のようにベッドの上を転がっている。

そんなにいいもんか。俺の愛用ベッドは。

「あ、でもこつちの世界でも分からないことはたくさんあるんですよ。例えばパソコンは無いし、他にも人間独特の行事とかは全く」

なるほどね。

「でも色々とクラスの皆に教えてもらってたんですよ。例えば、手の繋ぎ方とか……」

って、何教わってんだっ!?

あのクラスの女子は何考えてんだか全く。

「でもむやみにつないじゃ駄目なんだって言われました。うーん、奥が深いですね」

深くない深くない。

その後はルウはベッドの上、俺は床で寝ることにした。

夕食はルウをおいて俺だけが下に行き、何か手ごろな食料を持ってルウに渡す。

親には夜食だと言ってね。

この前のようなヘマをしないように部屋には鍵をかけておいた。
ここで親が入ってきたらさすがに言い訳できないさ。

しかし高校生でこんな偽同棲生活になるとは思わなかったな。

ルウは疲れたのかすぐに寝てしまった。

今夜はあの聖人とかいうのに起こされませんように。

そんな事を思いながら俺も眠りについた。

5：地獄の業火

目覚ましが鳴る。

朝がやってきたかと思うと俺の上に何か柔らかくて暖かいものが乗っついて起きられない。

その柔らかくて暖かいものは俺の腹の部分に頭を置き、うずくまるようにして静かに寝息をたてていた。

こんな姿を見たら死神なんて思わないよな。普通。

その少女は紺色の髪をさらりと白くて綺麗な手で撫でながら少し上体を起こした。

「あれ？ …… なんでゆうくんがそこにいて私の……！？ えっ？
もしかして上に乗ってました！？」

ええ。乗っていましたね。すうすう寝息を立てながら。
そついうと彼女の顔が少し赤くなるのが分かった。

「ぎよ……ぎよねんなさい！　じゃなくて、ごめんなさいっ！！」

別にいいですよ。あんな可愛い寝顔が拝めただけ幸せですよ。
さて、今日はいい目覚めだ。

朝は昨日と同じようにリビングに置いてあったパンを食べ、学校へと向かった。

通学路を歩く男女と言うのは悪くない物だなんてこのときは思っていた。

しかもその少女は実に容姿端麗という言葉が似合う外観を備えている。

しかし、クラス内となるとそういう話ほどネタになる物はなく。

「おっ！ 雄二、お前って隅に置けないんだな」

クラスに入った時の第一声がそれだ。

隅に置けない？

何の話だか。

「まあまあ、そう否定するなっ」

だから何が？

「昨日一緒に帰ってたろ？ ルウちゃんと」

俺は硬直した。というか目の前にいるヒロが何となく聖人に見えた。
いや、これは違うだろうが。

とにかく、いきなりというかなんで知っているんだ？

「いや、昨日予備校が急に休みになったんでお前を追いかけてたら
二人が交差点前にいるのを見かけてさあ。焦った焦った」

このやろう。

まさか学校始まって3日で見つかるとは予想もしなかった。

よりによってこういう話題はクラスに広まる速度が恐ろしく早い。

しかもルウはこの事態を知らずに俺の後から教室に入ってきた。

もちろん女子軍からの質問攻め。

よく見えなかったが顔が紅潮していたように見えた。

今日学校はその話題がトップニュースとなり、俺とルウはその対処に追われていた。

「ねえ、雄二ってルウちゃんと付き合ってるの？」

単刀直入に聞いてきたのは恵美でいつもより少しおとなしそうな口調だったと思う。

「違うって、友達。仲いい友達」

俺はこの逃げ道で今日一日逃げ続けている。

「そっか」

いつもの恵美には無いようなおとなしい声で答えるとそのまま恵美は自分の席に戻っていった。
なんかまずかったか？

「雄二は良いよなあ」

と、俺の横の席で頬杖をつきながら純が呟いていた。
何のことだか。
ルウは友達だからな。

「分かった分かった。お前は鈍いからな」

意味分かん。

確かに鈍いかもしれないがいきなり言われても困るぞ。

「お前さあ、わざとか？」

何が。

「ふう、お前がわざとそんなキャラを演じているわけ無いか。大変だな恵美も」

なんで恵美が出て来るんだか。

今日はそんなネタがありふれる中で一日が過ぎていき放課後に。
今日は聖人来なかったな。
というかどうか二度と来ないで下さいませ。

「ねえゆうくん？」

後ろの席から人差し指で俺の背中をちょんつと突いてきたルウは少し困惑したような顔をして小声で言った。
なんか背中がむず痒い。

「今日、一緒に帰ったらまずいかなあ？ みんな私とゆうくんの関係とかいうの聞きたがってるんだけど、私死神だつてばれちゃったのかなあ……」

ばれてはいないから大丈夫。

皆が聞きたがってるのはそっちの関係じゃなくて他の関係だろう。
でもさすがに今日も一緒に帰るのはまずいか。

「じゃあ俺が先に帰ってるから後を追ってきてください」

そういうことで俺は先に帰り家でルウを待つことにした。

道は分かっているって言うてたし大丈夫だろう。

家についたころは5時過ぎでいつもならこの時間ゲームでもしてるんだが、何となくそんな気分にならなかった。

窓の外が暗くなり始めたころ。
次第に焦る気持ちが沸いてきた。
ルウはまだ来ていない。

「遅い」

もうすぐで7時だ。
いくらゆっくり歩いているにしても遅すぎる。
何かあったんだろうか。

7時を過ぎたとき親が帰ってきた。
俺は不安な気持ちに駆られルウを探しに行くことにした。

「どこ行くの？」

「純の家！」

親に聞かれた問いには反射的にこう答えていた。
純の事は親も知っているしこう言っておけば大丈夫だろう。
俺は通学路を自転車で逆走し学校まで着いたが、途中にルウはいなかった。

「どこ行っただんだよ？」

学校まで全力で自転車をこいできた俺は体力をだいぶ消耗していた。
飲料水なんぞ一瞬で私の前にひれ伏すだろう……じゃなくって。

「何やってんだお前？」

そこにいたのは部活帰りの純だった。

この際誰でもいい。

「あのさ、ル……松野さん見なかったか？」

純は不思議そうな顔をしていたがゆっくりと指を俺のもと来た道へと指差し、

「グラウンドでサッカーやってたときにあっちに小走りで行くのは見たけど」

すれ違ったか？ それとも迷ったのか？

「サンキュ！！」

そういつて俺は再び家に向かって自転車をこぎだした。後ろで純が何か言っていたが聞こえなかった。

だが昨日の交差点まで来てもルウの姿は無かった。

本当にどこ行っちゃったんだよ？

信号が青になるのを待っている間辺りを見回してみたがルウはいない。

その代わりに知っている人物を見かけた。

「恵美！！」

俺の前方にいた恵美に声をかけるとびくっとして彼女はこっちに顔を向けた。

「雄二？ 何してんのこんな時間に？」

「ル……あゝ松野さん知らないか？」

そういうと恵美は小さく声を洩らした後なぜか少し目を伏せて

「ごめん、見てない」

それだけ言つと恵美はごめんねと言い残し歩いていってしまった。

「おつ……おい!?」

何かまずいこと言っちゃったか？

何か俺嫌われた？

恵美の後姿を見ていたとき体が嫌な気配を感じた。

何かこの前の、紫の空間と似た空気。

そしてその空気は徐々に膨張していき、俺の視界に異常な光景が浮かんだ。

紫色の光が柱のように天空に向けて立っている。

場所は俺の家の方。

嫌な予感がした。

周りの奴らには見えてないのか？

恵美は気になるがこの気配の方が気になる。

何か嫌な感じだ。

俺はその紫の柱目掛けて自転車をこいだ。

周りの風景が全く気にならなくなるくらい速度で俺は一直線にその紫の柱を目指した。

そしてその前まで来たときに俺はわかった。

この柱の中にルウはいる。

外からは見えないがルウの気配がする。

音はせず、ただそこに垂直に空へ向かって伸びている紫色の柱。そしてその柱は俺の家のまん前に立っていて、通行人はその柱をわざと避けて歩いていた。

まるで最初からその場所は無かったかのように。

「行くしかねえよな」

俺は覚悟を決め、その紫の柱に突っ込んだ。

耳鳴りのような音がして中へ。

そこでは信じられないような光景が広がっていた。

目の前には見慣れた少女がいた。

しかしそこにいる少女の漆黒の翼はぼろぼろで、黒のマントも破れ、鎌は地面に刺さっていた。

なんなんだよ。これ……。

そしてその少女をそこまでしたであろう相手は少女の前に立っていた。

俺と変わらないくらいの背丈で、真っ赤な髪、赤いマント。

鋭い眼光のその男はルウを見下すように見ていた。

「紺碧は所詮この程度か？　こんな事じゃあのカップを聖人から守りきるなんて不可能だ」

何なんだよ？

俺は怒りのような感情が胸にこみ上げ、気づいたときにはそいつ目掛けて走っていた。

「ん？　こいつか？　例のカップは。よくここに入って来れたものだ」

「うおおおお!!」

こいつは絶対許さない。

そんな感情が俺の中で溢れていた。

「止めてっ!!」

俺の拳はそいつの顔の近くで止まった。

「その人は聖人じゃないの。私のボス、アレスト」

こいつが？ ルウのボス？

でもなんでこんな事に？

「それは……」

「全く、なんなんだ？ このカップは前代未聞だな。我に殴りかかってくるとは」

そいつは俺の手を掴み振り払うと自分の前髪を払い

「こいつは早めに我らの容量として確保しておくべきだ」

……何？

「そんな事させません!! 私を守りますから……そんな事は……」

なんだ？ どういう展開だ？

「このままこいつを放置しておいて聖人に狙われるくらいなら我ら死神側の容量として変換してしまえばこの戦争は勝ちも同然なのだぞ？ それだというのに」

「私が聖人から守りきつても結果は同じです！！ だから……ゆうくんを変換するなんて言わないでください」

俺にもようやく話はつかめた。

つまり俺がいなければ聖人側は神を作れないわけだから俺を死神側の容量として使ってしまうおうという事なんだろう。

そうすれば聖人側は神を作り出せずに負ける。

そうすれば戦争は終わる。

「生きている人間を変換したら聖人とやっていることに変わらないじゃないですか！ そんなの……」

ルウはそういいながら泣いている。

どうしてそんなに俺のことを？

ルウだって死神側の立場なのに……。

「殺してしまえばいいのだ。その為に我がわざわざ赴いた^{おもむ}のだからな」

殺す？

俺、殺される？

確かに言い分的には正しい。

生きている人間を変換するのが駄目なら殺してしまえばいい。

それに俺一人で聖人と死神の戦争が鎮圧するというなら犠牲も少ない。

そっという判断だろう。

「そんな事は……私がさせない！」

そういうとルウはぼろぼろな体で地面に刺さっていた鎌を構え直しそいつに向けた。

鎌はところどころ燃えたような跡がついている。

どうしてそこまで……

「全く、理解できない奴だ。どこで教育を間違えたのか。そのような感情を抱くから弱くなるのだ」

そついうとそいつは右手を顔の前に出し目を閉じた。

「地獄の業火よ、我が力となり目の前の物全てを焼き払え！」

その光景はあまりにも酷かった。

目の前で鎌を構えていたルウを取り囲むように火柱が上がり、その火柱は一気にルウを吹き飛ばした。

鎌は宙を舞い、ルウは紫の空間の壁に叩きつけられ、墮ちた。

俺はすぐに走りよった。

「ルウ！！」

返事は無かった。

ただ彼女の手が俺の手を握り返し、離れた。

「殺してはいない。同志を殺しては罪に問われるのでな。変な奴だ。お前を殺し、容量を回収して戻れという指令を送った途端反抗しました。よほどお前のことを殺したくなかったのだろう。そして我が

代わりに来たところ、そいつはこの空間を作り出し我の事を待ち構えていた。ゆうくんは私が守ると言っただけだ」

そんな……自分のボスまで裏切った俺のことを。

なんでそこまで……？

どうして？

「余計な感情は迷いを生む。それではお別れだ」

俺はそいつに背を向けてルウを守るような体制だった。

もう駄目だ。

そんな思いが俺の中にはあった。

しかし、そいつの攻撃は痛くなく、むしろ暖かい程度だった。

「……耐火の印……まさかお前につけられていようとはな」

俺はそいつの炎が当たった背中を見るとそこには赤い魔方陣のような物が浮かんでいた。

「どおりで一回も反撃してこなかったわけだ。自分の守護印を渡しておき、あらかじめ我の焰から守っておくとは。無茶をする」

背中……そこで俺は頭の中に学校での光景がフラッシュバックした。ルウが俺の背中を突いた時。あの時だ。

あの時、ルウは俺に耐火の守護印を渡してくれていたんだ。

自分の分を、俺に。

こいつから俺を守るために。

「全く、いつでも無茶苦茶な奴だ。お前も信頼されているようだ。今回の件は一旦中止しよう。我は死神界へ戻る。ただし、聖人から

カップを守りきれぬときは我は地獄の業火のアレストとしてお前を殺しに行く」とそいつに伝えておいてくれ」

な……いいのか？

俺を殺して死神側に容量として捕らえられれば戦争は終わるんだぞ？
それなのに？

「そいつは死神界で我を除いて最強と語られる死神だ。幼少から大人より強く、速く、そして優しかった。そして紺碧とまで呼ばれるようになった彼女は我に今まで反抗などしなかった。……紺碧を頼むぞ」

そついうとそいつはマントを宙に投げると次の瞬間にはその場所にはいなかった。

「ん……」

その間にルウが声を上げた。

俺はとにかくルウの体を抱き上げながら名前を呼ぶことしか出来なかった。

「ルウ……ルウ……」

「ごめんね……？ 怪我無い？」

心配するのはこっちだ。

耐火の守護印だっけか？

それを俺に渡さないでおけばここまで怪我はしなかったのに。
そうしていると紫の空間は元の色に戻た。

とにかく俺の部屋まで運ぼう。

そう思いルウを担いでみたが家には親がいる。

ばれないように行くか？ 行けるか？

一応ルウも人並みの重さはあったしダツシユは不可能だ。階段もあるし。

いつそ親に言ってしまうか？

「あ、私は大丈夫。1時間ぐらいで傷は治るの。だから庭の隅っこにでも置いておいて貰えれば治り次第ベランダまで飛んでいくから」

そう言つとルウは俺の体から降り、ゆっくりと歩き始めた。

こういう時にああそうですかなんていつて放つておくことも出来ないんだが。

「じゃあ俺も一緒にいるからさ」

それくらいしか出来ないだろうし。

「そそ、そんな大丈夫ですって！ 私は人間より頑丈ですし、ほっほらご家族の方に心配をおかけいたしましたではいけなく危うく大変でしょ？」

最後のほう呂律るりつが回つてなかったが、かといってこのまま一人で置いておく事も出来ないし。

「大丈夫です！ あゝじゃあベランダの鍵開けておいてください。案外すり抜けるのも大変なんで」

そう言つとルウはのろのろと家の庭のほうへ歩いていった。心配なだけだな。

仕方ないので俺は家に入り親が庭に行かないよう監視していた。
夕食中もなんだか気が抜けない。

「どうしたの？ ゆうくんなんか顔が硬直してるみたいだけど」

夕食を食べ終わって親の行動をしつかり監視している俺の表情はよ
っぽど硬かったのだろう。

「いや、別に。あつ、今日も夜食貰ってくから」

はいはいと親は言っていたが俺の頭の中はルウの事でいっぱいだった。

傷が回復するって言ってもあの怪我は人間なら致命傷じゃないか？
それにあいつ、アレストとか言う奴は俺のことをカップとか呼んで
たし。

考えれば考えるほど意味不明だ。

今更だけど俺が巻き込まれている事態は相当やばいんじゃないか？
聖人对死神の戦争に巻き込まれてるんだぞ。

はあ、なんで俺が。

あ、そうだベランダの窓の鍵開けとかなきゃな。

思い出したかのように立ち上がり階段を上った先にある俺の部屋の
ドアを開ける。

さすがにまだいないか。

俺は窓の鍵を開け下を覗いた。

で、下から何か俺のほうへ飛んできて掴まれた。

「あ、ゆうくん。お待ちせーっ」

さっきまでぼろぼろで傷だらけだった少女はすっかり回復し翼を生
やして俺の前を飛んでいた。

本当に回復するんだ。

部屋に入るとルウはベッドの上に転がった。
あんな傷を負っても回復するなんて、死神ってのは凄いな。

「んゝ気持ちいい」

ごろごろと転がってはしゃいでいるルウはまるで子供のようだ。
いやいやそれよりも。

「なんであそこまでして……」

彼女はいくら傷が治るといっても瀕死の状態まで追いやられ、自分のボスを敵に回してまで俺を守ってくれた。
自分の身を犠牲にしてまでも。

「だってゆうくんは私が守るって言ったじゃないですか」

そういうとルウは小さな体で大きく伸びをして

「任せてくださいね」

本当に頼りになるな。

あゝそうそう夜食。

持ってきたおにぎりを食べているルウを横目に俺は窓の外を見た。
さっきのがルウのボス……か。

「おいしいゝゝい！ あゝさっきゆうくんの事をカップって言ってたのは私たち死神の人間の呼び名みたいな物です。深い意味は無いですよ」

そういえば俺カップとか言われてたな。
人間イコール、カップか。

「そういえばさ、ルウの傷は治ったみたいだけど、マントとか鎌の傷も治るわけ？」

俺が見たときはマントも鎌もぼろぼろだったし。

「治せますよ。えっと……原理は教えられないんですけど治せますほら」

そう言うところウはブレスレットから鎌を取り出した。部屋の天井に届いているその鎌は近くで見ると重々しく、こんな少女が持ち上げているのが嘘のようだ。

それに焼けたような後も消えていてまさに切れ味抜群、触ったら怪我するぜ、なんて思わせるような切っ先。

「私の愛用の武器です。ムーン・ソルバルケ。大きくて振りやすいんですよ」

ここでは振らないで、なんて言わなくても分かってるか。

「持ってみてもいい？」

「はい！ どうぞどうぞ」

その鎌は俺が手を触れると冷たく鉄のような感触だった。それに、

「重っ！？ え？ ちょっと」

ルウが手を離すと俺は両手でその鎌を支えるので精一杯だった。
ルウはこれ振り回してたよな。

俺って貧弱だな。

「しょうがないですよ。この鎌は死神の手に馴染むように作られますし、逆にゆうくんがこれを軽々持ち上げたほうが驚きです」

重い。

そう言っただけで鎌をルウに返すとそれをブレスレットの中にしまいこんだ。

便利なブレスレットだな。俺の汚い部屋のいらないものもそこにしまいこんでおけるのに。

「いらないものはちゃんと整理しましょうよ」

注意された。

まあ、確かに。俺の部屋にあるものって結構無駄だな。

何があるかはご想像にお任せしよう。ありすぎていちいち説明するのも大変だ。

「ん、そういえばゆうくんにもあの空間の場所が見えるようになったんですね。私たちがいた」

そつえば。紫の柱は他の人には見えていないみたいだったし。
俺も進歩……したのか？

「たぶん私が耐火の印を渡したときにちょっと能力が移っちゃったとか、そんな感じだと思います。へえ、そんな事もあるんですかね

？
「

聞かれても困る。そういえば耐火の印ってどんな物なんだ？

「目には見えません。というか、私にも原理は分からないんですけど何種類か種類があつてゆうくんに渡したのは耐火の印。その名の通り炎を退ける効果があります。他に私が持っているのは耐風の印、耐水の印です。アレストが持っている耐電の印、耐聖の印、耐氷の印。これ以外は私は知りません。へへ」

色々あるんだな。

でもそんなのを俺に渡しておいて良いのかな？

「もちろんですよ。何なら私が持っている残り二つの印もゆうくんに渡しておきたいぐらいですよ」

でもそれじゃアルウが無防備状態になっちゃうんじゃない。

俺の無事も大事かもしれないけどルウがやられたら俺もやられるんじゃない。

「私はこのマントのおかげで基本能力が底上げされているのである程度の耐性はあるんですよ」

ほお。

便利グッズその2だな。

ブレスレットにマント、グッズではないけど翼。
凄いなあ。

「ぜんぜん凄くはな……来ます」

へ？

ルウの顔つきが急に険しくなり、俺の部屋が一瞬でどこかの森林のような場所に変わった。

森林といってもこの前のように木が俺とルウを囲むように聳^{そび}え立っていて、空は紫、木も紫。

もうこの空間を見るのも三度目、いやさつきも見たから四度目か。

「ゆうくんは私が守ります！！」

上空に教室のときと同じように大きな穴が開いた。

ルウは一気にマントを羽織り鎌を構え、翼を大きく羽ばたかせながら上空から来るであろう敵に備えていた。

するとまもなく何か動物の鳴き声のようなものが聞こえ、何かが近づいてくる音がした。

その視線の先にある黒い穴から出てきたのは俺が今まで見た聖人のような姿ではなく熊のように、いやそれより大きな怪物だった。

6：敗北、陰陽

俺の部屋から一瞬で森林に変わったこの空間は居心地悪く、その空間の上空にある穴から出てきた生物は虎でも熊でも馬でもなんでもない、が何かと聞かれても答えられない大きな獣だった。

オレンジ色の体毛で羽が生えていてコアラのような体の巨大化したもの。

俺の知っている物で当てはめるとそんな物だ。

で、そいつが上空から降りてくるのを待たずにルウはそいつ目掛けて飛んでいった。

……たぶん。

俺の目では追えない速度で、ただ残像と飛んでいく音が聞こえただけ。

まあこんな化け物はこの前のように瞬殺していただいて、早く家に帰りたい。

この空間はどうしても好きになれないんでね。

と油断している間に鈍い打撃音がした。

そして俺が立っている場所のちょうど横に何か飛んできた。

とは言っても化け物は何事も無かったかのようにゆっくりと地面に降り立った。

って……

「おつ、おい！！！」

あまりのことに気が動転してきた。

今まで無敗だったルウが今日だけで2回やられてる。

それに一回目はルウのボスであって、敵ってか聖人じゃない。

ああ、何だかさっぱり分からなくなってきた。

「今は……耐氷の印……？」

耐氷？

つまり氷の攻撃が効かない？

「私の攻撃は全部氷属性なの。ムーン・ソルバルケはそもそも氷の武器で私……この武器しか持ってないんです」

あれ？

それってもしかして

「……」

ルウは黙って俯いたまま鎌を握ってる。

が、その空間に響く重低音、さっきの化け物の足音。

俺もルウみたいに戦えればいいんだが、無理……だよな？

「……絶対守ります」

俺がその化け物が近づいてくると横にいたルウが一瞬でその化け物へ飛んでいった。

ルウが振る鎌が化け物に当たる前に化け物の前に文字列が浮かび鎌を包んでその動きを止めてしまった。

そして化け物が思いつきり右腕を振り上げルウを叩こうとしている。

「危ないっ！」

その声を言い終える前にルウはすばやい動きでその攻撃をかわし、後ろに回りこんで……。

俺がルウの動きを追っている間に化け物はルウを無視して俺の目の

前まで一瞬で移動していた。

あまりの恐怖で体が動かない。

ルウの声も微かにしか聞こえない。

俺……もう駄目なのか？

俺の目の前にいる化け物は大きな口を開けそこから炎を……。

炎？

俺の視界が一瞬だけ赤くなりすぐにその化け物の顔が現れた。

俺は耐火の印を持つてるからこいつの攻撃は効かない？

「これならいけ……」

これならいける。

そう思ったんだが、そうじゃなかったかもしれない。

その化け物は俺に殴りかかってきた。

本当に間一髪でかわしたが、俺が元いた場所は地面がめり込んでいる。

絶対当たったら死ぬ。

でも……ルウは今のをもう一発くらってるんだよな。

それなのに、俺を守ろうとして……。

「ゆうくんっ！！」

猛スピードで飛んできたルウは俺に飛びついてきた。

「ごめんなさいっ……」

いや、そんな謝らなくても。

俺はこうして無事なんだし、それよりも敵、敵っ！！

「今の私じゃ勝てません……だからゆうくんだけでもここから逃が

さなきや……」

逃がす？

そんな、ルウを置いていくなんて出来ないだろ。

大体、ルウは伝説の血を受け継いだ紺碧なんだろう？

こんな化け物……。

「悔しいけど……わ、私ゆうくんに会えて本当に」

そこで俺の耳にルウの声は聞こえなくなった。

と言うよりも他の大きな音でルウの声が聞こえなかった。

ルウのすぐ後ろにいた化け物は砂のようになって溶けてしまっていた。

そしてそこには見たことのある少女が立っていた。

「……結……だよな？」

そこにいたのは俺のクラスの病弱娘、ポーラ・結。

「あれ？」

ルウは化け物がいなくなり代わりにそこに立っている少女を見て驚いていた。

というか俺も驚いているんだが。

俺が知っている病弱な結はそこにはいなく、いるのは凜々しい少女だった。

それもシャツに短パン。

なんだか普通の人間だな。

「あなたは陰陽の影のポーラですね？」

って？

知り合い？

というかもうクラスで会ってるよね？

「そう。でもこの程度の敵なら属性転換を使って戦えば赤子同然」

く、口調すら違う。

いつもの結はなんか

「ご理解いただけましたか？」

的なお淑やかキャラだったのに。

「クラスにいたときはまさか陰陽の影だとは……」

どうなってるんだか。

「雄二」

はっ、はい！！？

今まで雄二君なり松野君と呼ばれていたのにいきなり呼び捨てで呼ばれました。

なんか結なんだけど結じゃないような。

「私は聖人、死神、どちらの味方にもつかずにこの世界への影響を減らしている。別にあなた方に干渉するわけでもないし守ろうとしたわけでもないけど違反は許さない」

もうキャラが変わりすぎて誰だかわからない結が言う言葉もイマイチ理解できない。

違反って何だ？

「聖人側が送り込んできた今の化け物は合成生物。合成生物は違法の産物」

あいつは違法生物だったのか。

とは言ってもあんな奴が俺の事狙ってるのかよ。

「私はこれを死神界の上層部に報告する。それによって戦争の早期終了を願う。そして」

結は宙に右手を掲げ宙に白い光を放った。

って、眩しいぞ。

その眩しさがなくなり始めたときに結の手には鎌が握られていた。

大きさは今のルウの鎌より一回りほど小さく、色は黒と濃い青で妖しい光を放っていた。

「これは無属性の鎌。さっきのように耐性がある敵にも攻撃は通る。重さは98ポンド、直径176センチ」

どこから出したんだよ。ルウみたいにブレスレットは使ってないし。

「空気中の歪みを使用した圧縮タイプの保存領域。その鎌はあなたに」

そういうと結はその鎌をぽんとルウに投げ渡した。

って、98ポンドって40キロくらいだっけか？ もっと上か？

結は軽く持ってたし、それを渡されたルウも片手で軽々と受け取ってるし。

「えっ？ あっありがとっございま……」

「私はひとまずあっちの世界に帰る。学校は転校した事にしておく」
なんか淡々と語ってるな。

「この空間は戻しておく」

用件だけで終わる会話だな。

そう思っていると森林だった世界は一瞬で俺の部屋になった。
さっきと違うのはルウが持つてる鎌と結がいること。

「最後に」

今までに顔色一つ変えないで話していた結が少し口元を歪ませ発した言葉。

「その鎌のカラーコーディネートは私。名前はリア・マティ」

そう言うつと結は消えてしまった。

結局、何なんだよ。

俺の部屋に異常は無さそうだし。

「陰陽なんてはじめて見た……」

陰陽、か。

結がねえ。

そつえば結ってどうやってあの化け物倒したんだ？

武器なんか持ってなかったし。

「陰陽は戦い方も何も詳しく分からないんです。ただ分かるのは聖

人の味方でも死神の味方でもなくて中立の立場。戦闘能力は聖人側、死神側のボス並みだと言われています」

俺たちのクラスにそんなのがいたなんてね。

休みがちだったのは病気とかじゃなくて何か他の用事があったからなんじゃないかな。
ところで

「その鎌重くないの？」

片手で持つてるけどそれって98ポンドって言ってたよな。

「ちょうどいい感じですよ。いい色合いだし、無属性の武器だし、ゆうくんより軽いし」

そういえば初対面るとき俺のことを抱きかかえてくれたんだよな。重そうなぞぶりは見せてないし、力持ちだなあ。
腕すごい細いのに。

「無属性か……いいなあ、早く使いたいなあ」

ここで使わないで下さいね。俺の部屋が一瞬で真っ二つになっちゃう。

無属性ってそんなに凄いのか？

「無属性はどんな耐性でもはじき返せない万能型の武器で、滅多に手に入られるような物じゃないんです。相手属性の弱点はつけないんですけどね」

つまりさっきみたいな化け物が出てきてもはじかれる様な事はない

のか。

何かゲーム感覚だな。

「うーん、早く使いたい……」

ルウの目は輝いてキラキラしている。

ベッドに腰掛け鎌を眺めているルウは子供のように見える。

「あ、でも凄いデータ量……」

そういえばルウがいつも鎌をしまっているブレスレットにも容量が決まってるんだよな。

要するにメモリーカードみたいなもん。

「これじゃあ全部入らないなあ……でもこの鎌の曲線が……」

ブレスレットを見て悩むような顔をしながら鎌をまわしている。

危ないなんて多分思っていないな。

なんか俺の事含め周りが何も見えてないような。

すっかり自分の世界だ。

どうにかしなきゃ。

「あっあああああのさあ!？」

いつもより大きめにかつ親に気づかれない程度に声を出しルウを現実呼び戻す。

「この先端の……っえ？ あ、はいっ!!何ですか？ 何でしょう？」

完全に自分の世界だったな。
んで用件は何にしようか。
俺がそんなことを悩んでいるとルウは不思議そうに首をかしげている。

「あのさあ」

とりあえず思いついたことを言葉にしてみた。

「ルウが使ってた昔の鎌……えっと、むーんばそるんけ？」

「ムーン・ソルバルケです……よね？」

あ、そうそう。

俺名前覚えるの苦手だなあ。

そういえばルウの名前も長かったよな。

覚えてないなんて言ったら怒られそうだな。

「その鎌って俺じゃあ使えないのかな？」

ルウがその新しい鎌を使うなら昔の鎌はいらないんだよな。

そうすれば容量も減ってブレスレットにその鎌収納できるんじゃない？

「うーん……ゆうくんに使ってもらえるなら嬉しいんだけど、初級の鎌じゃないからそこその力が必要だと思っくんですよ……」

そういいながらルウが昔使っていた鎌がブレスレットから出てきた。この前持たせてもらったときも感じたが、重量感があって、重いその鎌。

「あ、これならリア・マティが収納できる分の容量が空きますね。
ムーン・ソルバルケをゆうくんが使えるといいんだけど」

が、渡されたその鎌は十分すぎる重さで振り回せそうにも無かった。
使え……無いかも。

この前で気づいてはいたが、やっぱ重過ぎる。

「ですよ。でも、持っていて貰えるなら嬉しいんですけど。容量
も空くし、ゆうくんが私の物を持っているっていうのも……」

そこで黙ってしまった。

俺が持っているとか何か防衛効果が出るとか？

「とつ、とにかく嫌じゃなければ持っていてください。私の使い古
しですが」

そりゃ嫌じゃないですよ。

いざとなったら火事場の馬鹿力でぶんぶん振り回せるかもしれない
し。

つて、これ持ち歩くのは無理だろ！？

「あ、ゆうくんはカップ、いえ人間ですから自らに収納できますよ。
あ、えっと人間は容量を持っているって説明しましたよね。それで
その容量は自由に使えるんですよ」

今までの人生、うってか地球が始まって以来そんな話はニュースでも
聞いてないぞ。

ん、まあ、死神とかも一切ニュースになってないか。

「使い方は簡単なんですよ。右手を自分の胸に当てて目を閉じ、出

したい物を念じながら右手を胸から離すんです。あゝこの時目を開けても大丈夫ですよ」

随分と簡単に言いますねえ。

あれ？ それって出し方じゃ？

収納の仕方は？

「あゝそっかゝ、すいません。収納も簡単で左手にしまいたい物を持つて右手を胸に当てゝ舌を軽く噛んで下さい。軽くて良いんですよ。軽く」

そんなことで出来るのか？

それだつたら今までに誰かが偶然にもしまつちやつたなんて事は無いのか？

「それはありえませんよ。だってそれが出来るのはこうやって死神、もしくは聖人にやり方を聞いた場合のみですから」

じゃあ俺はもう出来るのか。

どれどれゝ左手に鎌を持つて……重いっ。

それで右手を胸に当てて舌を軽く噛むつと。

そうすると一瞬で鎌は消えた。

これって……本当に俺の中に鎌が入ってるってことか？

「はい。ゆうくんは容量が大きいからいっぱい物を入れられますよ。あゝでも入れ過ぎると整理がつかなくなりますから気をつけてくださいね」

なるほどね。

じゃああんまり無駄に入れ込まないほうがいいな。

邪魔な物全部入れちまうかとも思ったけど。

「こらこらっ。それじゃあもう一回出してみましようか」

よしっ、えっと右手を胸に当てて、目を閉じて……鎌を想像、それで右手を胸から離すっつと。

すると離れた右手には鎌が握られていた。

っ、重い……。

「わあ、凄い！これでゆうくんもいざとなったら鎌を出せますね。私みたいにブレスレットもないから便利ですし、いいなあ」

便利なのか？

ルウみたいに戦えるほうが俺は嬉しいんだけどな。

守られてばかりでもなんか……な。

「大丈夫ですって！今度こそ私がゆうくんを守ります。このリア・マティで！」

戦えない俺じゃ足手まといだし、任せるしかないか。

よろしく願います。

「ふふ、こちらこそ」

俺も戦えたらいいんだけどな。

それよりも今は俺が聖人にやられないようにしなきゃな。

7：友達

俺は松野 雄二。

どういうわけか俺は聖人とかいう奴らに狙われていて、死神のルウに成り行きで守ってもらっている。

信じられない話ではあるが聖人と死神の間で戦争が起きていて20日くらいで戦争は終わるらしい。

どういう計算なのかは知らないが、そうすれば聖人に俺が狙われる心配もなし。

これだけ早く時間が経って欲しいのはゲームの発売日を待つとき以来だ。

毎日危険な状況にいるのはどうかと思うしな。

しかもどういうわけか最近聖人が襲ってこない。

この前の化け物が襲いに来てから音沙汰なしと来たもんだ。

クラスメートの結は本当に転校したことになるって、行き先はシンガポール。

何故に、どうしてシンガポールなのかは知らないが。

幸いハーフだったのでクラスの誰も変には思わなかった。

シンガポールっていう単語に首をかしげる物はいたがね。

ルウはクラスにはすっかり馴染んでいるし、俺も純やヒロ、恵美と平凡な日常を過ごしていた。

いや、正確には恵美の様子は多少変だったけど。

「……」

いつもなら快活な恵美がここ最近は窓の外を見ながらぼけっつしている。

あり得ない。今までの恵美を見ていて休み時間に机から一回も立たないことは珍しい。

つてか無いんじゃないか？ そんな事。

「あのぉ……大丈夫でしょうか……ねえ？」

「へえ？ あぁ うん！ どうしたあ？」

こんな感じ。

いつもだったら。

なあにが大丈夫でしょうかねえだか！？

とか言われるのがオチなんだけど。

この前ルウを探してたときに会って以来元気が無い。

あの時出かけてたし何かあったのかな？

「何か不思議でかつ非日常的な出来事でも発生ですか？」

後ろの席からルウが話しかけてきたとき、俺は窓の外ばかり眺めている恵美の真似をして外を眺めていた。

特に変わったことなし。

窓の外ではすっきりと澄み切った空が展開されている。

ただただぼうっとしているだけだな、ありゃ。

「なあんか恵美の様子が変なんだよね。まぁ……勘違いなのかも」

そういうとルウは何か今までに見たことの無いような複雑な表情をしてぼそっと

「小林……恵美」

っ？ はい？

何かルウから不思議な不思議なオーラが出ていた気がする。

何でなんだろう？　これまた気のせいかな？
あのお？

「新しい鎌で……？　あ、どうしましたっけか？」

ルウは何か危ない考えをしてなかったか？

確かに鎌ってワードが声に出てたような気がする。
気にしたら負けか？

というかルウってこういうキャラだったっけか？

再び休み時間。

先ほどのルウは何だったのか。

と、それは置いておいて恵美だ。

純にもとりあえず、意見を聞いてみるか。

「なあ、何だか恵美がおかしい様な気がするんだ。最近」

純は目を見開いて口をぽかんと開けている。

その後徐々に目を細めて俺を見てきた。

更に俺の視界の中にヒ口も入ってきて話題に入ってくる。

「お前はさあ、馬鹿だ」

こいつに馬鹿と言われるのは幼稚園児に罵倒されるのと同じくらい屈辱だ。

なんでさっきの質問から馬鹿と呼ばれなきゃいけないんだ？

それでいてこの二人はなぜ納得しているんだ？

俺の質問の仕方がそこまで馬鹿げていたか？

結局何だったのか分からないまま昼休み。

俺は弁当持ちではないために学食を利用するんだが、ぶっちゃけク
ラスの9割は学食。
混雑必須。

案の定、座席はすぐに埋まってしまっるのがその日はルウの横が空い
ていた。

というか、毎回ルウの横が空いてるんだよな。なんでだか？

「あ、ゆうくんっ!!」

この反応も覚えた。

あ、と言うか毎日席取っておいてくれるような感じだよな。

「今日はカレ〜え！」

子供みたいなのは相変わらず。

スプーンを両手に持ってこぼれんばかりの笑顔。

こんな笑顔を見てると聖人が襲って来ていた頃が夢のようだ。
最近全然出てこないから俺も少し記憶から薄れてきている。

このまま戦争が終わりさえすれば平和なのにな。

「ゆう〜くんっ？」

ルウのほうを向くとにこにこした笑顔でカレーすでに完食。
俺、ラーメン未だ手付かず。

「食べないなら……貰っちゃうぞおっ」

そう言っただけのラーメンをスナイパーのように狙っている。
食べたいんですか？

うちの夕食や朝食って足りてない？

「いえいえ、朝食に夜食、本当にいつもありがとうございます。今頃ゆうくんにお食事貰ってなかったら死神なのに死んじゃってます」

死神が死ぬって変だな。

死神が死ぬと雨になるんだっけ？

ちなみに学食代は俺の財布から。

本人には言わないが、毎日ってのは少しこたえる。

「えーっと、このお昼もどのような感謝の言葉の並びを選択すればいいか……」

感づいたのかな？

でもこれまで助けて貰った経緯を考えれば安すぎるよな。

それでもルウがぼろぼろになってまでも俺を助けてくれたのは覚えている。

「とにかく本当にありがとうございます」

どういたしまして。

で、その後の休み時間。

俺は純とヒロに拉致られた。

トイレに。

で、第一声。

「お前は松野さんとうという関係なんだ？」

松野さん？

ああルウね。俺も松野だし、少し困惑するよな。

で、関係？

「関係って……」

” 一緒の家に住んでます ”

魔法をかけられても言えないな。

” 彼女は死神で俺を守ってくれているんだ ”

……こりゃ駄目だ。

” 宿命のライバルだ ”

俺のアホ。

「関係って、友達だよ」

結局こういう普通の返事しか浮かばない物で。

しかもこういう返事は信じてもらえないほうが確率的に上だ。

「友達にしては……」

そこで口を動かすのをやめたヒロの言葉に続くように純が

「俺たちが何かと突っ込むのもどうかと思うけどさ、友達だってんなら誤解は解いておいたほうがいいんじゃないか？」

誤解？

お前らって何か誤解してたのか？

というか、なんで俺尋問されてるんだ？

「お前って鈍いよな。やっぱ」

「こいつ、駄目だ」

そう言い捨てて二人は歩いていってしまった。
俺、何か悪いことしてる？

「恵美もその言葉を待ってるんじゃないの？」

悪戯っぽく純が去り際に言った言葉は何か俺の心に引っかかった。
恵美にその言葉？
はて？

で、二人を追うように教室へ。

恵美は……教室で机に座ってじつと窓の外を見ている。
さっきの二人は隅っこに立っていて、ルウは女子と何か会話している。

照れているような顔に見えるのは気のせいかな？
で、恵美にその言葉なんだよな？
その言葉？ どの言葉？

「恵美」

とりあえず呼んでみた。

まあこの恵美の憂鬱ゆううつ気分もこっちのテンションが狂うしな。

「え？ あつ、雄二。どうした？」

とりあえずいつもより反応が鈍い気がする。
で、何て言えばいいんだっけか？

「俺は誤解を解くべきである友達だ」

自分で何を言ったか分からない状況。
英語を無理矢理日本語翻訳したような感じた。

「っ……はぁ？」

恵美の顔が呆れたような顔になった。
スマン。

俺も多分こんなこと言われたら呆れるな。
自分で言っただが。

「あゝ忘れてくれ。で、最近元気ないけどどうしたんだ？」

もう普通に聞こう。

「なんか窓の外見てたりで、いつもの恵美らしくないような」
思ったとおりのことを言うほうが楽だ。

教室のざわめきの中恵美の声はいつもより小さく聞こえた。

「一つ聞いていい？」

あゝどうぞどうぞ。

「松野さん……いつも雄二と一緒にだし、仲良し、苗字同じだし、
そのせいなのか知らないけどゆうくんなんてあだ名で呼ばれてるし、
学食ではいつも隣だし」

語尾が強くなっている。

なんか元気になってきているような。
っで、またルウの話題か。

そついやさつきあの二人もルウについて話してたんだ。俺の記憶力ってどうなってるんだ？

「髪は紺色できれいだし……しかもこの前会った時も松野さんこうって聞いてくるし！！」

一気に元気を回復した、というか何故か怒りゲージマックスになった恵美は机に両手をついて立ち上がった。叫びながら。クラスが静まる。

なんて言えば良いんだったっけ？えっと、あ、そうだ。

「友達っ！！！！！！」

俺が脳裏に浮かんだ言葉を咄嗟に発すると恵美の表情が少し和らいだ。

「ルウは友達で特にすごい関係とかデラックスな関係じゃないからさつきの二人の言いたいことは分かった。やっと分かった。

友達って言えば良かったんだな。理由は知らないけど。

「と……なあんだよ！ この馬鹿雄二っ！ 本当？」

睨まれている様な。

「イエス」

いつもの鉛平手打ちを喰らった。

懐かしい感触だ。

これは元気になったってことでいいのかな？

「そっかそっか、あゝもうくっそ。よっし、明日からも頑張るぞっ！」

元気だ。

いつも通りの恵美、復活。

まあ、よく分からないんだけど良かった。

で、一件落着で席に着く。

ルウと友達って言えば良かったって言う理由がよく分からないが、友達が一緒に住んでるっていうのは凄いな。

で、後ろから突かれる。

ちよんちよんと小さな指で。

振り向くとそこには何か言いたげな、考えてるようなルウの顔があった。

また耐性の印でも？

「小林 恵美さんとはどういう関係なんですかつ！？」

小さな声で、何故か……威圧されているような気もしたんだが、とにかく聞かれた。

恵美との関係？

どっかで聞いたような？

あ、さっきはルウとの関係だったな。

で、どっという関係って……。

「友達だよ？」

うん。友達だ。

それでルウは黙ってしまった。

何か考えている。絶対この顔は何か考えている。

「今日は絶対一緒に帰りましょうね！　ねえ！」

乗り出してきた。今日は、というかほとんど一緒に帰ってますけど。

放課後、恵美は元気になった。

純とヒロはもともいつも通りで、今日も部活に予備校。

本当に忙しいね。あいつらも。

俺は俺でいつ襲われるか分からないっていう恐怖があるんだが。

で、俺を守ってくれる役割のルウは帰り道、何かを聞きたいけどどうしようか悩んでいるような表情を維持していた。

「なんか聞きたいことある？」

耐え切れなくなった俺がそう聞いてみるとルウはびくつと反応して俺のほうを見て立ち止まった。

で、何かを決意したような顔をして

「あの、小林　恵美さんは友達なんですよね？」

そのことか。

まあ大体予想済みだったが。

「うん。友達」

「私は？」

「へ……？」

何となく不意をつかれた。

「私はゆうくんにとってどういう関係ですか？」

真面目な顔だ。本当に。

ルウは俺にとって？

どんな関係か？

「小林 恵美には友達って言ってましたけど、あれは本当なんですか？」

え？

ああ、そういえば言った。

聞いてたのか。

本当かって……。

「私は、ゆうくんを大切に思ってますし、大切に思われたいんです……！」

「あ……うん」

とりあえず口に出た相槌。

そりゃルウは大切だ。

俺の事を守ってくれるし。

一瞬のようで長い沈黙の後ルウは俺の腕を掴んで

「渡しませんからね」

とだけ言ういつもの笑顔に戻った。

とりあえずこの状況を俺にわかる適切な日本語で説明できる人大募集だ。

自給も500円くらいなら出してもいい。

……安いか。

「そういえば」

その一言でルウの顔から笑みが消える。

まだ何か……？

「鎌が新しくなつてからまだ一度も使ってない……誰か手ごろなのを……なんちゃって」

ごめんなさい。

今本気で怖かったです。

「冗談ですつてば。もう」

笑いながら俺の腕をひき、てくてく歩いていく。

この子が死神だっていう事が未だに信じられないが、分かってはい

る。
本当に、不思議なもんだよ。

ルウは死神、いや、友達以上の何かにもうなっているんだから。俺
の中で。

8：緑陰と紺碧

そのまま家に着いたその日も聖人の襲撃は無かった。

ルウは鎌を使いたがっているが、聖人なんて来ないでくれたほうが平和だ。

人間界は人間だけで十分。

死神は一名いるが。

「今日の夜食もおいしかったです！　ごちそうさまでした」

ベッドの上で正座している少女は夜食のおにぎり三個を30秒程度で食べてしまった。

しつかり噛んでますか？

ルウがいることを除けばいつも通りの日常。

クラスメートが一人転校したけど。

その結も陰陽とか言う奴だったし。

「そついや、あいつ。何だっけ？　ルウのボス」

夜食を食べ終えたルウはにこにこ笑ってこっちを見ていて。

不気味じゃないんだが耐え切れなくなった俺から話題をふってみた。

「アレストですか？　彼は私の教育係で、いい人ですよ。彼には殺されかけましたけどね」

笑顔で　殺されかけた　なんて言葉を言う目の前の17歳の死神。つてかあんなのに教育されてたのか。

「そいつに聞いたんだけどさ、ルウって小さい頃から大人にも勝っちゃったんだって？　凄いよなあ」

「ふふ、その時は加減も知らなかったし。おかげで紺碧なんて呼び名も貰えましたけど。あと分かっていると違いますけど私が連絡していた上層部の人って言うのは彼です」

あの赤髪がルウのボスか。

確かにルウをぼろぼろにしたくらいだ。

よほど強いんだろうな。

「我は負けられぬのだ」

いきなりルウが腕組みをして俺に低い声で言い放った。

キ……キャラ崩壊か？

「アレストのまねですよ、私は我なんて言わないですって」

まねか。

なんかルウが少しずつ笑いを取ろうとしているキャラになっているような？

なっていないような。

「そういえば連絡ってどうやってしてるの？」

いつもルウはいつのまにか上層部からの連絡があった、そう言っていたが実際に会話しているのは見たことが無い。

「なんていえば分からないんですけど、心の声って感じかな？　頭の中で会話してる感じ」

それまた便利な。

脳内無線通信機。なんてな。

「ゆうくんは出来ないんですよね？ 便利なのに」

そりゃ無茶だ。

それは死神とかの特権って事で。

「それは……あれっ？」

そう言うとき突然辺りを不審に見回している。

明らかに何かおかしい。

そんな顔をして。

俺には何にも感じない。

「何か気配がするんだけど……亜空間は作り出されていないし、姿も……」

そこまでルウの声は聞いた。

そこで声は途切れ俺とルウの間に人が立っていた。

背は低く、小柄。

白いオーバーコートのような物を羽織り、緑色の髪をさらりと払った。

「緑陰……」

なんだ？ こいつも結みたいな奴か？

「相変わらずじゃねえの。紺碧。で俺の名前くらいは覚えてっか？」

ルウ」

最後に名前をぽつりと言うとその男は皮肉そうに笑った。
何となく分かる。味方ではない。

「緑陰のリク……」

その声は何か悲しそうで、ルウの顔からもそれは読み取れた。
ってか誰だよ？ りく だかなんだかしらねえが。一応ここは俺の
家で……

「これが例のカップ？ ふうん、マジで微妙。こいつぜってー戦え
ねえじゃん。足手まといもいいところだな」

俺を明らかに見下すような態度で言われた。
このやろっ……。

俺の思考回路がその言葉を現す前に俺の部屋は部屋ではなくなった。
紫色の何も無い空間。
亜空間。

とっさにルウも身構える。

「大丈夫だつての。別にその雑魚を殺そうともしないしお前を殺
ろうとしてもねえよ。ただあのままじゃ話しくかつたろ？」

何だこいつ？ 不適に微笑む整った顔立ち。
両手をコートのポケットに突っ込み天を仰ぐその姿からは何か余裕
のような物が感じられた。

「こいつが同じ空間にいる限りお前は本気じゃないし、俺もくたば
ることはねえだろう？ あ？」

俺の10メートル先くらいにいるそいつは俺に指をむけルウを見ていた。

本気じゃない？

「……何も言えないか。ハッ！？俺を聖人界の負け犬にした紺碧の死神が」

何なんだ？

こいつ何を話しているんだ？

聖人界の負け犬？

「私は……」

ルウの声は弱弱しく、いつもの強さは感じられなかった。

「別にいいさ。あれはお前の意思じゃなく死神として仕方なかった。それは認めてる。ただ、そんな死神が弱くつちなあ？あれから10年。お前だってもっともつと強くなってるんだろ？」

沈黙。

俺は何も言えないし、ルウもただ黙っていた。

「今日は殺りにきたんじゃないやねえんだ。ただ困った死神さんに警告をっつと。お前、そのまんまじゃ死ぬよ？」

それだけ言つとそいつはコートを翻し一瞬でその場所から消えた。ほぼ同時に俺たちは元通り俺の部屋にいた。何が何だか。

「遅かったか」

そんな声が俺の後ろから聞こえ、咄嗟に振り向いた。
そこにいたのはルウのボス。

アレスト。

俺の部屋は集合場所じゃねえ。……なんて言えない。

「緑陰……すでに気配は無いな」

ちよつと待て

「おい、何が何だかわかんねえよ!？」

そう言うときアレストは俺を気にすることも無くルウの元へ歩み寄った。

ルウはベッドに座って俯いている。

「おい、そのカップ」

カップって俺かよ。

人間は死神界ではカップと呼ぶらしい。

「紺碧は任せたぞ。我は緑陰を追おう」

それだけ言い残して消えた。

何なんだよ。

アレストがいなくなった空間には俺とルウだけ。
黙っているルウと声をかけられない俺。

沈黙が続いている中先に声が出たのは俺だった。

「さっきの奴、なんかルウの事知ってたみたいだけど、知り合い？
10年前とか」

下手に聞かないほうがいいのかもしれないけどこのままの沈黙にも
耐えかねた。

「……緑陰は、リクは小さい頃から遊んだりしていました」

ようやく口から出てきた言葉は弱弱しく、それでもはっきり聞こえ
る声だった。

「小さい頃から一緒に遊んで、仲良くしていました。聖人と死神な
のに。戦争も始まっているのに。私は、私たちはそんなの気にしま
せんでした」

ルウは泣いてはいないが顔をあげようとはしない。

俺も身動きすらせずにただルウの次の一言を待った。

「それでも戦争は続きます。私たちが7歳の時に私が所属している
部隊と彼が所属している部隊で会談がありました。互いに実力ナン
バー1と2を連れて」

俺は息を呑んだ。

「その時私はナンバー2で彼もナンバー2です。弱冠7歳で各部隊
のナンバー2に上り詰めた戦士。そんな話から火花は散り、どちら
のほうが上か。そんな話になり私たちは相對することになりました。
友達だった。そんな理由なんて何にもならない。そう言われて仕方
なく戦いました。私は彼を倒しました。それで私には名前がついた

んです。黒味を帯びた蒼い髪の少女。紺碧」と

聞いたとき俺は何か心に不快感を感じた。

7歳のときから戦っていたルウ。

「彼は地面に倒れていました。紺碧の影だと。緑陰だと」

それがさっきの男か。

不敵な笑みが脳裏をよぎる。

「あいつが言ってたけど、本気を出せないって？」

あいつはルウに向かっていった。

こいつが同じ空間にいる限り本気は出せない。

こいつってというのは俺だ。

何かあるんだろう。

「それは……」

ルウは少し顔を上げ俺のほうを申し訳無さそうに見ている。

「ゆうくんが悪いんじゃないんです。ただ」

その後に続く言葉が俺に言いにくい。

そんな顔をしてルウは考え込んだような顔をしている。

「私の能力を全て開花させると、攻撃範囲が広すぎてゆうくんを巻き込んでしまいます」

つまり、俺がいるから出せないってこと。

俺がいるせいで。

この前みたいに自分がやられそうな場面になっても。

「だから……」

続く言葉を待たずに俺の声が自然と出てきた。

「俺のせいで……じゃなきゃあんな化け物本当は倒せたんじゃない……」

この前の化け物。

結が来てくれていなかったらルウは本気を出す前にやられていたんだ。

でも俺がいなければ。

「それでも私は……」

ルウは両手を握って力を入れた。

「私はゆうくんを守る！」

そう言った時にはつきりと見えたルウの顔と頬を伝う一筋の涙。

何やってんだ。俺は。

こんな子を泣かせて。

その後はお互いに沈黙。

聞こえるのは時計が活動している音。

どれくらい時が経ったのか。

このままつても何かあれだ。

……寂しい。

「あのさ」

「あのお……」

同時。

本当に同時。

と、ルウの顔が真剣そうな表情からいつもの笑顔に変わった。
そして笑った。

何か、俺ってこの子に助けられてばかりだよな。

「ごめんなさい。私らしくない、落ち込んでる場合じゃないのに。
私は今の状態でも強いんですよ！」

につこり笑っている彼女の表情は俺の気持ちをも明るくさせる。
で、俺が言いたかったこと。

「ルウが本気を出すためには俺がいなければいいんだよな？」

そう言つとルウは少し首を傾けながら

「そうですけど……聖人はゆうくんを狙って亜空間を作り出して来
ますし、そこから出たとしても他の聖人がそこに襲ってきたら」

「そうじゃなくて」

俺には考え付いたことがあった。

「ルウの攻撃が全て氷属性だって言つたよね？ だつたら俺が耐氷
の印を持っていれば」

そこまで言つとルウが俺の言葉を止めた。

「耐氷の印でも止められません。その時の私はちょっと怖いですよ」
にこつと笑うその顔。

しかし、俺の意見、廃案。

「もし仮に私の攻撃を全てゆうくんが弾いてくれれば大丈夫ですけど、それはちょっと……」

ルウの視線が俺を下から上へ品定め。
ごめんなさい。

「しょうがないですよ。むしろゆうくんに防がれるようじゃ紺碧失格ですつ……？ ああああああ！！！！？？？？」

この時俺は人生で一番といっても過言ではないほど驚いた。
ホラー映画は見たこと無いけどね。

「どうしたっ……」

とりあえず驚いて口がうまく回らない。

「無属性！！」

立ち上がったルウはいきなりブレスレットから鎌を取り出した。
その鎌は不気味に光る。

しかもそのまま鎌の刃を俺の左肩に当てた。

……冗談はやめてください。

いくら聖人が最近来なかったからって俺を試し切りつてのも……。
いや、でも確かに俺がいなければこの戦争は終わるわけだし、ここ

でルウに殺されてもおかしくは無いのか？

にしてもいきなりだな。

せめてあと一度ポテチを食べておくべきだった。

そう考えている間に鎌は俺の体を通り抜け俺の右に。
つて？

「やっぱり！ 無属性の攻撃は人間には効かないんだ！！ これも
分かってて陰陽は……」

効かない？

んな事言ったって、物理攻撃が効かないなんて。

「無属性は人間で現す夢のような物です。体はそう思っているけど
実際にはそれは起こっていない。原理を説明するのは無理ですけど
……」

まあここでまた難しい数式を出されたところで理解は出来ないんだ
けどな。

確かに今斬られたみたいだし。無傷だけど。

「これで私も本気で……あっ」

まだ何かあるのか？

「私本気になると性格がちょっと変わるような気がするんですよね。
意識してるんじゃないんですけど」

ほうほう。

それはそれで……と、ここで俺の脳内では数パターンのルウの姿が

浮かんだ。

男勝りなルウや超熱血なルウ。
なんか、イメージが。

「でも良かった。これでルウが本気出せるみたいでさ」

今までのが本気じゃなかったって言うのも驚きだけど。
それにしても、最近本当に襲いにこないな。
来て欲しくはないけど。

「確かに変です。リクだって本来は顔色を変えて襲いに来てもいいはずなのに。冷静で」

あの緑髪ヤローか。

あいつが聖人側のナンバー2で、ルウは死神側のナンバー2か。
ん？ それは10年前の話か？

「今も変わりませんよ。私たちは小さい頃から戦争中なのに秘密で会って、遊んでいました。始めてあった時の事は覚えてないんですけどね」

それでその二人が7歳でナンバー2かよ。

二人とも才能あり過ぎってか。

俺にも何か才能ないかな？才能。
くじ引きは強いぞ。

「とにかく、聖人がいつ一斉に襲ってきてもおかしくないんです。
私も気を引き締めなきゃ」

その言葉と裏腹に表情は笑っていた。

あ、そうそう。

「そういえば今日帰りに渡さないって言ってたけどあれってどういう意味？」

そう言うところの顔はみるみる紅潮。
何かまずかったか？

「ゆうくんって……もっ、もういいですよっ！……」

何故か拗ねてしまった。
が、すぐに俺の顔をまじまじと見て

「絶対、ぜえったい！！ ゆうくんは私が守りますっ！！」

俺はこの言葉に色々な意味が混ざっているとは気づかなかった。

9：本気の意味

今日は雨。

地面を叩く音が激しく聞こえる。

天気予報では確立30%くらいだったんだけどな。

あの天気予報士は今頃どう思っているだろうかね。

「雨……か」

ぽつりと呟いたルウは物悲しげで。

と言うのも大体予想はついていて、俺は憂鬱な気分だった。

死神は死ぬと雨になる。

つまりこの雨は死神なのだろう。

水蒸気がどうのこうのって言う俺たちの理論は否定されているような気がするが、死神がいるだけでも現実離れたな。

「雨って好きにはなれないんですよね」

窓の横に立ち外を眺めているルウはすでに制服。

寝るときは私服の中でも楽な姿で寝ていたが、俺が起きたときにはいつも制服に着替え終わっている。

早起きだねえ。

通学路は晴れた日とは違い冷たい風が肌を直撃する。

傘を持つ手も悴^{かじ}み一苦労だ。

雨の勢いが増している。

「うつひゃあ、濡れた濡れた。あの天気予報め」

俺たちが下駄箱に着いた頃後ろからヒロが飛んできた。
傘もささずに走ってくるお前が悪い。

大体、朝起きたときには振ってたんだから気づけ。

「まあ気にするな。風邪を引くとしてもそれは俺だ」

それでうつされちゃたまないから。

そんな会話をしている時にルウの友達も下駄箱にやってきた。
名前なんだっけな……なんて言ったら駄目か？

「おやおや、嫉妬ですか？ ゆ・う・く……」

ヒロが何か良くないことを言っていたので耳を引つ張った。

嫉妬って何だよ？ なんで女子同士の会話に嫉妬なんだ？

それとお前にはそんな呼び名で呼ばれたかない。

恥ずかしいんだぞ。これでも。

「マジになるなっ、いたた……話せば分かる。少しでも分かり合おうじゃないか」

「断る」

こいつは……。

朝クラスでは制服のほとんどがびしょ濡れな生徒とそうでもない生徒に分かれる。

大抵が家の遠さとか土地的關係なのだが、傘をささない馬鹿も一名いるが。

「ほんと、ヒロっていつも俺たちと違うことするよね」

横の席にいた純も呆れ顔。

そういえば純が眼鏡をしている。

昨日はしてなかったのに。

「お前って目悪かったつけ？」

眼鏡をかけ始めた人に言う言葉といえばこれが定番なんじゃないだろうか？

「ああ、これね。まあ見えないわけじゃないんだけど、一応ね」

眼鏡をかけた純は一言で表すと優等生、もしくは真面目君だ。

生徒会長的なキャラにも見えなくない。

制服の着こなしも完璧だ。

その日の授業は雨の降り続く中静かに行われた。

雨の日っていうのは知らぬうちにテンションが下がってしまうもので、俺もいつもよりはおとなしいんじゃないかなと我ながら思う。

しかしこの静寂も次の時間には終わるであらう。

次は体育だ。

雨なので体育館だが、うちのクラスの男子郡はこの時間にはハイテンション。

俺は運動音痴なので大活躍は出来ないんだけどね。

で、想像通り体育前の休み時間のテンションときたら。

まるで世界に平和が訪れたかのような。

そんな勢い。

そんな男子を横目に女子は更衣室へ移動する。

で、女子がいなくなつた後のトークは酷い。

「おい、松野お〜」

今まで雄二とか呼んできたヒロが何故か苗字で俺のことを呼ぶ。つても、これはお決まりのパターン。

あいつが俺を苗字で呼ぶときは何か考えている。

本人は気づいていないようだが、俺にはバレバレだぜ？
で、何だよ。

「ルウちゃんってあんな体なのに胸だっ……！？」

とりあえず殴っておきました。

こいつの脳内のピンク色を違う色に変えてやりたい。
ってか、それを俺に言うな俺に。

「でも雄二ってすごい松野さんになつかれてるような気がするよ？
やっぱり……」

黙れ、その優等生眼鏡。

なつかれてるかもしれないけど。

「いやあ、あの体から一体どんな……があっ」

再び殴っておきました。

一発目を喰らっておとなしくなったかのように見えたヒロはすぐに回復していた。

その回復力ならルウと並べるんじゃないか？

ただルウの回復は真正銘本物だぜ。

そんな会話をしている間に俺たちは体育館に。

体育館は男女合同で半分に分けて使う。

まあ、それなりに広いんだな。それでも。

今日はバスケか……。

自慢じゃないが俺はあの憎きかごの中にこの球を入れられたことは無い。

本当に無い。

そんな俺とは大違いな女子側の英雄は早くも歓声を浴びていた。

「す……凄過ぎだろ」

男子も思わず見入ってしまう視線の先には紺色の髪を靡かせ華麗にシュートをしている少女。

ボールを巧みに操り、相手のディフェンスを嘲笑うようにすり抜けシュート。

その速さは女子はおろか男子でも止められないんじゃないかと思われるほど。

……さすがは紺碧、なのか？

試合が終わったとき、女子側の得点差が40点を超えていて容赦ないなど数人が呟いた。

俺もその中の一人だが。

体育が終わると男子は再び教室、女子は更衣室へと。

そしてここでもヒロという魔物が覚醒するのだ。毎回。

「ルウちゃん凄いやなあ。あのむねえ……」

本日三度目。

今回は力を強めて拳を放ってしまった。
いい加減にしなさい。いい加減に。

「でもあれは凄いよね。相手チームの女子なんか戦意喪失だし。雄二も少し教えてもらったらどう？」

お黙りなさい。優等眼鏡。

お前のあだ名これにするぞ？

やたら眼鏡が似合うキャラだなお前。

で、ふとルウの眼鏡姿が浮かんだ俺は負けか？

授業が終わる頃。

雨はやんでいて雲の隙間からは太陽が顔をのぞかせていた。

よっ、久しぶり。

そんな言葉が頭をよぎる。

関係ないが俺の中学の先生の名前は太陽だった。

太陽なのに陰気だったけどな。

「雨止みましたねえ」

後ろから話しかけられ俺はその声のほうへと振り向く。

そこにいたのは体育でも勉強でも一流な少女。

で、何か様子がおかしい。

俺の目線の下にわざわざ潜り込むかのように顔を近づけ下から俺を見ってくる。

これを上目遣いって言うんだっけ？

「あれ……こうじゃなかったっけかな？ うんしょっ」

徐々に上目遣いから何か違う視線に変わっている。

正直怖い。

もうすぐ白目ですよ。

かわいい顔が台無しに……。

「上手くいかないなあ……魔法」

魔法っ？

どんな魔法だ？

誰が吹き込んだ？

「えっと、裕樹君が言うにはこれで雄二もイチコロだぜって」

ヒロか。よし、あいつには俺の鎌を……。

出し方だつて覚えてるぞ。右手を胸に、目を閉じ鎌を念じて胸から右手を離す。

こんな所では出せないけど。

俺はルウを元の体勢に戻しヒロの元へ。

こいつは……。

「なあにがイチコロだ！」

悪びれた様子の無いヒロは苦笑いしながらも本心では大爆笑。そんな感じだろう。

「まあまあ、可愛いルウちゃんの上目遣いが見れたんだからいいじゃないかよ。代わりに俺が見たいぜ」

まああれは可愛かった……じゃなくてだなあ。

「お前も罪深き男だ」

いきなり真面目な顔に変形したヒロの顔。

もはやこいつの顔は真面目な顔は出来ない物かと思つてたぞ。
しっかしセリフは良く分らないが。

「何話してんのよ？」

と、あまり良くないタイミングで現れた恵美。

今日は鉛のような平手打ちが無かったただけ良かったか。

「それが雄二がルウちゃんの上目遣いで見事ノックダウン」

「されてねえだろうが」

反射的に答えたが、こうでもして止めておかなければこいつはろくな事を言わない。

で、恵美の目が怖い。

「ふううん……上目遣い……わっ私だってそれぐらいっ」

は？

なんで恵美は慌ててるんだ？

とにかく俺には状況がつかめないまま恵美が俺を睨み付ける。

上目遣いのつもりなのかもしれないが、俺の知ってる言葉で一番近いのは睨むだ。

上目遣いのようにやさしく俺を見るのではなくただ下から睨んでい
るだけ。

もう止めて下さい。

「なっ何よ！」

馬鹿やろ！

それだけ言い残し恵美は自分の席へ。
正直怖いぜ。あの睨みは。

放課後、すっかり雨は止み傘をさす必要は無かった。
所々に出来た水溜りが太陽の光を反射している。

「ヒロのいう事は真に受けなくて良いんだからな」

帰り道、横にいるルウは未だに上目遣いの練習。
最近は聖人も襲いに来ないから平和だ。

「せつかく私も本気で戦えるのに」

で、その後にも何か言葉を続けようとしていたようだがそこで沈黙。
俺にもその沈黙の理由が分かった。

少しだけど空気が張り詰めているような感覚がする。

俺の肌が何かを感じている。

この感じ。

「ゆうくん、来ますよ」

分かってるさ。

日常から一気にかけ離れた空間に一瞬で移動した。

さっきまで見ていた下校中の光景からは人が全て消え、目の前に広がるのは一面紫色の空間。

亜空間だ。

久々だな。この空間。

そんなことを考えている場合じゃない事もわかっていたが。

「紺碧の名にかけて！！」

マントを羽織り翼を生やしたルウ。
久しぶりに見た彼女のこの姿は死神。

そんな彼女から目を離し上空を見上げるとそこから降りてきたのは
今までの聖人のような姿ではなく、俺たちと変わらない人間のような
姿だった。

その男は地に足を着けるとゆっくりと口を開いた。

「私は霍乱のキョウツ。そろそろそのカップを回収しないとまず
いんでね。俺たち聖人がやられちまうって聖人界じゃ大騒ぎさ」

長身で白いオーバーコート。

手には短剣を二本。

と、ルウが鎌を構え言い放った。

「あなたが出てくるほどとは、聖人側もお焦りのようで。悪いです
が貴方には彼に触れる前に消えていただきます」

あ……れ？

ルウの口調にいつものような弱弱しさは無く芯の強くしっかりとし
た声になっていた。

そういえば本気だと少し性格が変わるとかいつてたな。

自信が溢れるとでもいう事だろうか？

目の前のルウは今までよりも何倍も頼もしく見えた。

「言葉通りにならぬ事などいくらでもある。私は紺碧を倒しカップ
を捕らえる。それしか目的は無い」

その時俺はこの光景が信じられなかった。

そいつが放った攻撃は無数の雷撃を俺に向けて放ったものだろう。しかしその攻撃は全て俺に届く前に無効化された。

ただルウがその無数の雷撃に鎌を振っただけで。

ルウが鎌を振ったときに突風が吹いたが、ルウはそこに平然と立っていた。

その突風で相手はそこに立っているだけで精一杯。

何故か俺は風がきてもそれによつて揺らぐ事はなかった。

「なっ……」

相手は自分の攻撃が容易く無効化されたことに対する動揺を隠せない様子。

「貴方じゃ勝てませんよ。私はゆうくんを守る。そう決めたのだから」

その時俺は感じ取った。

これがルウの、紺碧の本気なのだと。

10：守られた空間

目の前の光景はもはや戦いではなかった。

「これほどに……ちっ」

相手のキョウツとか言う男はもはや悪あがきのように雷を放っている。

両手の指先から放たれた雷は一点に集中しルウの元へ。

しかしその攻撃も鎌を少し動かすだけで防がれてしまう。

それどころかルウはその場から動いていないのだから。

「驟雨」

しゅうつ　そうルウが言うのが聞こえた。

次の瞬間　自では追えないような速さで移動したルウはそいつの目の前に立っていた。

これじゃああまりにも差がありすぎる。

まるでルウは立ち向かう事の出来ない何か。

さしずめ自然災害といったところだろう。

ここで何故か沈黙の時間があつた。

ルウはそこから動いてはいないように見えるし　相手もその場で固まったようにルウを見上げている。

「ひっ……」

そんな男の声がしてその目の先にあるものを追うとそこには無数の光。

全て鎌のように円を描いた光でそれらが上空全体にびっしりと。俺にも影響がってこの事が……？

「私は負けないから」

その言葉が合図だったかのように一斉にその光はそいつ目掛けて飛んでいく。

俺のところにも数個飛んできたが、すり抜けるだけ。

その光はまるで魔法のようにそいつ目掛けて飛んでいく。

やがてそいつは影のように黒くなり、少しずつ消えていった。声も出さないままに。

「ふう」

ルウが翼をしまい地面に指を当てるとその空間は再び俺の部屋となった。

何も変わらない俺の部屋。

「大丈夫でしたか？」

いつもどおりの笑顔。

さっきのルウが戦闘モードだとして今のルウは女子高生モードでもいっただろうか？

「この鎌本当に使いやすいです！ 振りぬきやすくて」

無邪気に笑う目の前の少女は本当に強かった。

全ての攻撃をその鎌で無効化し、最大の攻撃を相手に浴びせる。

あの攻撃は俺にも当たる、いわゆる全体攻撃という物だろう。

だから今までは出せなかった。

「ゆうくんが無事なら全てはオッケーですね！」

この死神の少女はさっきまでの戦いを何とも思っていないかのように笑顔で、ゆっくりとベッドに腰掛けた。

「ルウってすごい強いんだな。あいつも結構強そうだったけど」

「ああ、彼は聖人側の……何番手だっけな？ 結構上のランクだったはずですけど。私は死神側に産まれた身として負けられませんから。小さい頃からずっと期待にこたえようとして頑張ってきました」

結構上のランクな彼を子供相手のように沈めた目の前の少女。

それほどまでに死神っていうのは強いんだな。

恐れ入りました。

「彼は7番手だ。それでもルウには及ばなかったようだがな」

と、後ろから声がする。

そこにいたのは赤い髪のルウのボス。

死神界ナンバー1の男。

「あ、アレスト」

ルウは特に驚いた様子も無く平然と挨拶。

俺は驚いて唖然と。

ってか不法侵入か？

なんで俺の後ろにいるんだ？

泥棒か？

「我は質問に同時に答えるような切れ者ではない。とりあえず二つ目と三つ目は否定しておこう」

クールに決めるな。

なんか嫌な感じ。

「アレストはどうしたの？ ゆうくに手を出すって言うんなら黙ってませんけど」

ルウは笑いながらも目は笑っていなかった。

ついでにボスに対して呼び捨てだ。

俺の予想ではアレストさんもしくはアレスト様だったんだけどな。あるいはボス。

「こいつはお前が守るのだろうか？ なら我は口出ししないでおこう。死神界ナンバー1と2で争っても無駄なのでな」

とりあえず俺の質問もスルーすんな。

とりあえずなんで俺の後ろにいるのですかねえ？

「ならお前の目の前に現れたほうが良かったか？ その方がお前が我の事を幽霊だ何だといって騒いでいただろう」

今だって騒ぎたいわ。

「まあそう騒ぐでない。お前ごとき一瞬で消せるのだぞ？」

その言葉には重みがあり、何故か俺は恐怖心を感じた。心のどこか奥に何か重たい物があるような。

「アレストっ！！」

ルウはそう叫ぶと一瞬で俺とアレストの間に立ちふさがった。本当に速くて移動したのが見えないほどだ。

「なに、本気ではない。本当だが。それで今ここにいるのは報告のためだ。直々に会って話したほうがいいだろうと思ってな」

報告。

そう聞くとルウはゆっくりと首を傾けた。

何でわざわざ直々になるのだろう。

今までは脳内で聞こえるテレパシーのようなもので連絡を取り合っていたのに。

「聖人側の部隊は残り一つになった。ナンバー1と2の所属する最強部隊だが、もはや勝利は近いだろう。先ほどここにいたやつは恐らく命辛々生き延びてここに来たということなのだろうな。ここまではいい報告だ」

と、そこでアレストの顔は歪んだ。

「聖人側の本拠地は小細工が仕掛けられていて死神の生体オーラを感じ取って遮断してしまう。つまり単体での進入は不可能だ」

「そんな馬鹿なっ！？」

ルウが驚きを最大限に表した顔で立ち上がった。
俺は何故か正座。

「だってそれは……神とされるユグドラの能力じゃ……ゆうくんは

「ここにいるから神の復活は不可能なはず」

なんとなく俺にも話が飲み込めたが、それってまずいんじゃない？
神がいると死神側は壊滅とか。

「その通りだ。恐らく神は復活まではしていないのだろう。ただその防御壁を張れるだけの容量のカップが聖人側に捕らえられているということだ。そいつの名前は小林恵美。17歳で容量は普通の人間よりも数倍はあるな。そのカップには及ばぬようだが」

小林恵美……って、恵美じゃねえか！？

「おい、それって」

「お前のクラスメートの一人であろう。まさかこんな近辺にここまですぐれた記憶媒体が二人もいるとは」

あいつ今日は学校にいたよな？

じゃあいつ？

放課後……か。

「捕らえられたのは恐らく56分前。……5時間を過ぎるとそいつの命は無いな」

おいおい、何の冗談だよ？

そいつの命は無いって、恵美が？

「……くっそ……」

俺はどうする事も出来ない。

「それで、我がわざわざここまで来たのは他でもない、お前を使う必要があるからだ」

そう言うのアレストは俺の前に立ち、手を俺の額に当てた。

「空き容量は十分だな。鎌が入っているがこれはルウの鎌だろう。この程度なら支障は無い」

「つまり、ゆうくんの容量を使ってその防御壁のデータを切り取り、そこに出来た空間から入り込むってことですよね？」

俺にはわけがわからない。

とりあえず俺を使ってどうのこうの。

「その通りだ。お前も成長したな。我が教えたかいがある」

そう言うのアレストは窓のほうへゆっくり歩いていき外の満月を眺めていた。

雲一つなく夜空を照らす満月は何か言いたげのよう。

「明日は悲しみの雨を喜びの雨へ……」

ルウは伸びをしてベッドに転がった。

そのままごろごろと。

俺は未だに正座。足が痺れてきた。

「準備が出来たらそいつを連れて月光の交差点へ。これが……最後の戦いだ」

そう言うとアレストは消えていた。
その場に一つの小さな石を置いて。

「あ、これブートストーンだ！ アレストもなんだかんだでゆうくんのこと心配してるんだなあ」

そういうとルウはその石を俺の手のひらに置き、両手で俺の手を握る。

ルウの手は鎌を振り回しているにもかかわらず柔らかく、しっとりしていた。

「えっと、これ何？」

「あ、これはブートストーンと言って自身の容量をエネルギーに変換して使う事が出来るんです。だからゆうくんも少しは戦えるかもしれないですね」

まさに便利な石だな。

「でも、必要なときだけしか戦おうなんて思わないで下さいね。私を守りますもん」

俺はその石をしっかりとポケットに入れた。
軽石のようで重さは無かった。

「えっと、ごめんなさいね、ゆうくんを最後まで巻き込むような形になってしまつて。一緒に来て欲しいんです」

そりゃもう行きますよ。

俺が行かなきゃいけないんだし、恵美も心配だ。

これで最後なら、ルウにも頑張ってもらわなきゃな。

「全力でいきますよ！　じゃあ行きましょつか。ゆうくん」

そう言っているとルウに手を引かれ俺は窓をすり抜けて庭に着地していた。
今俺はマジックショーを一瞬で行ったんだな。
ルウの手に任せて俺は進んでいった。

11：死神の世界

「そういえば月光の交差点ってどこだ？」

俺は今ルウに手を引かれ聖人側の本拠地に向かおうとしている。

アレストに指示された場所は月光の交差点。

しかしそんな交差点は知らないし。

俺が進んでいるのも見た感じいつもの通学路。

「はい、ここです」

たどり着いたのはいつも通っている交差点。

ここって月光の交差点なんて名前無かったような？

「ここがちょうど死神界との共通点になっているんです。ここが死神界への入り口」

そう言っただけで立ち止まったのはいつも通っている信号の下。

信号は赤へと変わり車が目の前を通っている。

って事は俺はいつも入り口を歩いていたらって事じゃ？

「ここは死神が開こうとしない限り開きませんよ。万が一迷い込んできてすぐに誘導係が元の世界に戻します。記憶を少し操作してね」

記憶の操作なんて出来るのか。

死神は魔法使いなんじゃないのか？ 実は。

「魔法とまではいきませんがね。じゃあ、行きますか」

俺の手を握るルウの手に力がこもる。

すると辺りは一瞬にして色を失ったように灰色の世界。

灰色のビル、信号、車。

そして、空。

この中で色があるのは俺たちだけだった。

「……………」

ルウはただ黙って目を瞑っている。

俺の手を握るルウの手の力が一層強くなる。

女子とは思えない握力だなしかし。正直少し痛い。

「えっ!？」

俺が発したその言葉は自分の目の前の光景に対して。

今まで灰色だった世界が一瞬で色を取り戻した。

建物などの構造を全て変えて。

「着きましたよ。ここが私たちの世界です」

俺の目の前にある景色は想像していた物とはかけ離れていて、目の前には花壇。

近くには筒状の建物が建っていて先ほどと同じように交差点がある。交差点以外は共通点がない。

「この交差点の名前が月光の交差点。死神界と人間界のゲートです。もう何年も、何百年も前から」

と、俺の前に炎の塊が現れてそこから人影が見えた。

その炎の塊は徐々に形を変え、やがて一人の人間、いや死神になった。

「来たか。死神界が珍しく思えるのも分かるが、時間がない。もう準備は良いか？」

そこにいた地獄の業火、アレストは真つ赤なコートを羽織り、腕には何重にもベルトが巻かれていた。
そして目の色も今までより赤く見えた。

「はあい。アレストも本気で行くんですね。こりゃ大変だつと」

相変わらず自分のボスに対して気楽に話すルウも一気に翼を生やし真黒のマントを羽織った。

この二人が死神界のトップ？。

そして俺は容量が多いとか言う理由で連れてこられた一般人。

さあ、今俺の立場と変わりたいものはおらんか？ 変わってやるぞ。今すぐに。

「ほらほら、ゆうくんも行きますよ」

と、しゃがんだルウは俺の足と肩に手をまわし、持ち上げた。俺を。

「それえっ！！」

そう言うところとアレストが飛んだ。

俺？

俺は何故かお姫様抱っこの状態で運んでもらってます。

なんか周りから見たら格好悪いな。

女の子に輸送されてます。

「そんな心配そうな顔しなくても大丈夫ですよ。落としたりは間違わない限りしませんから」

今不安になりました。

すでに上空50メートルはあるよな？　これ？
落とされたら死にますよ。

「その時は我が拾ってやる」

と横にいるアレストが……って。

俺はアレストの姿に驚いた。

ルウは漆黒の翼を羽ばたかせて飛んでいる。
それなのにアレストは翼なんか出ていない。
ただその身一つで飛んでいるのだ。

「アレストは熱を発してその上昇気流がどうのとか言う難しい原理で飛んでいるみたいですよ。いいなあ」

ルウはにこやかに言っているが、それってすごい事だよな。

あと、予想外に顔が近い。

ルウの顔は近くで見ると余計に……いかんいかん。

これじゃあヒロと同等だ。

「お前には翼があるじゃないか。我とて望んだ形ではない。それと、
我らの部隊は聖人側の本拠地付近の聖人を倒しに先に向かった。この調子だと我らが着く頃には外の雑魚はかたずいているだろう。こちら側にはシャルを派遣してある」

シャル？

「違いますよつ。シャルは死神側の3番手　毒手……だったかな？」

毒手って……。

俺の頭の中に何故か気持ち悪いイメージの人物像が浮かんだ。

「独修のシャルだ。いい加減味方の呼び名ぐらいは覚えたらどうか
な？　紺碧」

あつ、そうだったとルウは軽く苦笑い。

俺はお姫様抱っこ状態継続中。

重くない物かねえ？

「全然軽いですよ。片手でも持てますよ」

確かにあの鎌を軽々振り回してたし。

と、目の前には大きな大きな城が見えた。

真っ白で綺麗な城で、天使がいてもおかしくないと思えるほどの見栄え。

それなのに庭は赤く、血で汚れていた。

何人も、何百人もの……死体？

これって死んでるのかよ？

「酷い……」

ルウの弦きが先かアレストの声が先か、俺たちは地面に足をつけた。

「シャル！　どうした！？」

そこにいたのは20歳くらいの若い青年。
銀色の髪は血で汚れ、服のあちこちが切れていた。

「緑陰が一人でやつちまった。……あいつ一人で俺らの部隊は壊滅だ。相手側の部隊もいなくなっただが……っ」

緑陰。

この前来た緑髪ヤローだ。
ルウの、友達。

「リク……緑陰一人でなんて……」

「つまり残っているのは我らと緑陰、天光のみか」

アレストはそう言いながらシャルと言う人にこう告げた。

「残りは我らが片付ける。お前は万が一のために死神界での警戒を」

その間ルウの顔は深刻で、聖人側のナンバー2とはいえかつての友達が起こした自体を飲み込めずにいる様子だ。

俺は目の前に立つ城の前に張られている結界と言っのにふさわしい文字列を見ながら立ち尽くしていた。

今まで見たこともないような文字がドーム状に城を覆っていて、その境界線より向こう側には血の跡はない。

「カップ、お前は自分の容量を自分で使うことは出来るのか？」

使っって物を収納したり出したりだろ？
俺の中に鎌が入ってたのお前も見тар？

「自分で使えるのかと言うことだ。使えるならあの結界を自分の中に取り込め。それによって生じる歪みをこじ開けて我と紺碧は中に入る。お前や聖人はこの結界の影響は受けないので自由に出入りできるが」

やってみつか。

えっとしまいたいものを左手で持って……持つ？

「触ればいいんですよ。頑張って……下さい」

ルウは祈るようにこちらを見ている。

辺りの光景は人間界と変わらない様に見えるのに、その辺に転がっているのは羽が生えている人間。死神と聖人の区別はつかないが。恵美はこの城の中に。迷惑かけやがって。

そんなことを思いながらもその結界に恐る恐る手を触れてみた。何とも無い。

そのまま手がすり抜けて向こう側へと行ってしまった。

この状態でいいのか？

右手を胸に当てて、軽く舌を噛むと。

その瞬間に俺の体の中に何か暖かい物が流れ込んでくるような感触がした。

全身にそれが広がっていくような気がする。

「ヴァルキニア」

アレストの声で我に返ると俺の横の結界が碎けて地面に落ちた。落ちた結界はガラスのように割れ、そのまま地面へと溶けていって

しまった。

そして、その場所に出来た穴を通って二人が中に入る。
続くように俺も中へ。

俺が中に入ったときにはその結界は全て消えていた。

「ゆうくんすごい！ 転送速度も抜群ですね！」

そう言って飛びついてきたルウは本当に心の底から喜んでいるような顔で、抱きしめたくなった。
理性が止めたが。

「そういう行為は帰ってからやれ」

アレストは俺たちのほうを見もせずに城の城門に手を当てていた。
そのまま数秒。

「灼熱のフランシス、ノークアンヘルファイズ！」

その言葉をスイッチとしたように城門が爆発した。
熱風が辺りの物を吹っ飛ばす。

俺はルウが俺の前に立っていてくれたおかげで何ともなかったが。
煙が舞い上がり、視界が一時的に麻痺する。

しかしその煙も突風によって払われた。

視界が戻ったとき目の前にルウの姿はなく、俺の上空でルウは羽を
羽ばたかせたようだ。

今の突風はルウがおこしたものだろう。

「相変わらずすごい破壊力ですねえ。アレストは」

「紺碧もやっと本気を出したか」

とりあえず俺をはさんで立っているこの二人は化け物です。
分かってはいたけどさ。

そして煙がなくなつて分かったがアレストが破壊したのは城門ではなく自分の前の物全て。

そう言えば分かりやすいだろうか？

城にはくつきりと大きな穴が開いていてそこから城の向こう側の景色が見えた。

どんな技だよ。

「アレストは武器を持たなくても熱を外に放出して使えるんです。そのせいで私も勝てなくつて。武器を持ったら鬼です。ほんと」

死神ナンバー1はだてじゃないと。

俺もブートストーンとやらで少しは力が出せるみたいだけど、こんな爆発は起こせないぞ。十中八九。

「ここにいるのは緑陰と天光のみだ。一対一でやつても互角だろうが、相手側には未完成とはいえ神がいる。油断はするなよ」

「分かつてますつて。ボスっ」

俺は何をするべきか。

結界を破ったら俺の役目ってないんじゃない？

「お前はカップの人質を救い出せ。我らが戦闘中には守るものがないだろう」

恵美か。

確かに早く助けてやんなきゃまずいよな。

この城のどこかに、いる。

「ルウ」

「え？ あっ、はい！」

俺の短い問いかけに不意を突かれたかのように返事をする。

「リクとか言う奴と戦っても大丈夫なのか？」

これは当然の質問だと思った。

いくら戦争中で敵同士でも昔は一緒に遊んだ中。本当の殺し合いなんて辛いに決まってる。

「……私は死神として戦わなきゃいけませんから。それに……」

前髪をぴょんと指で払って照れくさそうにぼそぼそと

「ゆっ……」

何て言ったのか聞こえなかった。

「だから……ゆっ、ゆうくんを守るためならどんな事だってえっ……」

顔を真っ赤に紅潮させ、何故か頬を膨らませている。
俺も少し照れ笑い。

「我を差し置いて何をしているか」

って、入りたいのかよ!?

「くっ……くだらんっ! いいから早く行動に移すぞ!」

こいつ、案外ネタキャラか?

「さっ、さあ、行きましょう!」

俺の手をしっかりと握り、ルウは歩いていった。
先に歩いているアレストを追うようにして。

……この城のどこかに恵美がいる。

そして、これで戦争が終わる。

俺は不安を抱きながらもルウに連れられ、一歩、また一歩と進んでいった。

12：緑陰と踏舞

城内は静まり返っていて、聖人がいるのかも分からない。

俺に分からないのはともかく、死神二人も分からないんだからしょうがないだろう。

「どこかにいるのだな。派手に壊しすぎたか」

そりやさっきの爆発じゃ気づかないほうがおかしいでしょ。

こっそり忍び込んだほうが良かったんじゃない？

「もうばれてますよ。私たちは人間の呼吸を、正式には容量の書き換えを察知できますから。ゆうくんはずっと息をしないでいられるような特殊能力があるんなら別ですけど」

死にますね。

俺は小学生のときにプールで死にかけたことがある。

俺が潜っていた時にちょうど上にビニールのでかいシャチか何かの乗り物が現れて上に上がれなかった。

あれ以来潜るのは好きじゃないね。

「まあ、ゆうくんもブートストーンで少しは力が増すと思いますし、自己防衛くらいは出来るといいんだけど。」

そんなことを言いながら散策していたが、破壊された痕跡以外に不思議な物がない。

普通の城で、こんなところに神はおるか恵美ですらいるのかが疑わしい。

「カップの書き換えが少しだけ察知できますからいるのは間違いないんですけどね」

電波が微弱で察知できません。

そんなところか。

こんな派手に壊したせいでそれと一緒に吹っ飛んでしまいましたなんて言わないでくれよ。

「でも、最初は1ヶ月間ゆうくんを守るっていうのが指令だったのに、なんか色々巻き込んだじゃって……小林恵美さんもどこに行ったんだか」

俺が巻き込まれるのはしょうがないとしても恵美まで巻き込まれるとは。

こんな呑気にしてられないんだろうけど、何故かこの二人がいると安心する。

とはいえ、時間がないんだ。恵美は確かあと5時間、もう4時間無いか。それまでに助けなければいけない。

神なんかにさせてたまるか。

「まだ完全ではないですけどあの結界が張ただけでも相当な容量です。つまり、恵美さんの容量がどれくらいかは分かりませんが急げるだけ急いだほうが」

と、そこに俺の目の前を葉っぱが一枚通り過ぎた。

その方向を振り向いても誰もいない。

その葉っぱは明らかに自然の物ではなくどこかから飛ばされた物。それも俺目掛けて。

「あれま、当たんなかったか。へえ、いいじゃねええの。殺りがいがあるってもんだ」

この声。

どこかで聞いたその声の主は俺たちが歩いてきた方向に立っていた。緑色の髪に白いオーバーコート。

細身の体に不釣り合いなほどの威圧感。

そして短剣を構えて不気味に微笑んでいる。

「リク……」

ルウの幼馴染でもある聖人界ナンバー2。
今の葉っぱはこいつの攻撃方法だろう。

「緑陰か。天光はどうした？ お前一人で我ら二人、いや一応三人か。相手に出来るとでも思うか？」

アレストは俺たちの一步前に出て右手をリクの方へ向けている。
さっき城門ごとその前方の物を吹っ飛ばしたときと同じ。
ルウはまだその場に立ち尽くしている。

「まっさか、地獄の業火に紺碧の組み合わせに俺一人が立ち向かうなんて自殺行為じゃねえかよ。あの爺さんなら神とか言つのにデレデレさ。気色悪い」

天光というのは恐らく聖人界ナンバー1で、リクが爺さんと言っているのがそいっだろう。

つまり今神とかいう奴のそばに居ると言うことだ。

まてよ、だとしたらこいつはなんでここに来たんだ？

「分かってるならどくがいい。お前の属性から見ても我とは分が悪いであろう」

アレストは炎の技を駆使して戦うのに対して、あの男、リクは葉で攻撃してきた。つまり燃やされる。

まあ草じゃ炎には対抗できないよな。

ルウは氷だったっけ？

「そりゃあんたの攻撃は欲しくないね。俺もこの城みたいに風穴が開いちまう。それじゃすまないだろうけどよ」

短剣をくるくる回してぶらぶら歩いているリクは何か狙っているようにも見えない。

ルウはすでに戦闘モード。アレストも……なのかな？

アレストは武器を持っていないために判断しにくい。表情も読みにくいし。

「リクは……時間稼ぎなんですよ？ 勝てないって分かっても天光に指令されて……」

ルウの言葉でリクの動きが止まった。

凶星と言っやつか。小さくため息をつく。

「ま、そう言うのが正しいんだろうねえ。あの爺さんは死なない程度にやってこいって言ってたけどよ。この二人相手に死ぬって言うのも無茶だ」

ゆっくりとこちらを向きながら言う言葉は重みはなく、自身の危険も恐れていないかのようで。

「確かに2対1なら負けるが、生憎、そっちには無防備なお荷物がいるんでね」

一瞬だった。

俺の目の前には短剣の刃が見える。

聖人界ナンバー2の男は俺までの間合いを一瞬で移動して切りかかっていた。

短剣が俺の顔まで5センチあるかないかの所まで見えたとき、これまた一瞬で黒と紺のグラデーションの冷たい感じのものが現れた。

「無理だつて」

目の前にあったのはルウの鎌。

短剣を防いで鈍い音をさせている。

その鎌が視界を防いでいて何も見えなかったが、何かがぶつかるような音がした。

「サーメティオ！」

そんな言葉が叫ばれるのが聞こえて視界が戻ったときには辺り一面火の海。

そこには漆黒の翼を広げて飛んでいるルウと、背丈の2倍くらいありそうな大剣をリクの目の前に突きつけているアレストの姿。

あれがアレストの武器か。

所々大小の穴が開いていてそこを生き物のように炎が通り抜けている。

剣そのものが生きているかのように。

「我らに単身で挑むというのは自殺と同じ。気づいていながらも向かってくるとは」

「けっ……お前らは古い情報に流されてるんじゃないかねえのか？俺がナンバー2だって確認したのはいつだ？ええ？」

この状況でも苦しそうな顔すらせずにむしろ笑っているように見えたりク言葉は負け犬の遠吠え。俺にはそうにしか聞こえなかった。

それでもリクは続けて

「ナンバー1だとか2だとかはほとんどの場合変動しない。お前らだって死神界じゃトップ2のままだろうなあ。けどな、必ずいるんだよ。天才はよ。憎たらしい」

「危ないっ！」

風を切る音が俺の耳元でした。

俺は咄嗟に飛んできたルウに助けられたから良かったものの、そのままだったら直撃だ。

俺が元いた場所は地面にしっかりと後が残っている。

「こんな無茶しないほうがいいのに。私も最初からやらせてくれてもいいんじゃないの？」

その攻撃が飛んできた方向を向くとそこにいたのは白いスカートに赤いポロシャツ。

そんな普通の姿の少女だった。

栗色のショートカットに140センチくらいの背丈でにこにこしている。

こんな子がさっきの攻撃を？

何かが一瞬で飛んできたような……。

「こいつが今のナンバー2だよ。まったく、11歳で俺のことをコテンパンにしゃがったからな。さあて、これで2対2だ」

こんな小さな子がナンバー2？

ふと、気づくとルウはすでに戦闘体制にはいつていた。この前のように無数の光が上空にある。そして

「驟雨！」

一斉にその光がその少女目掛けて飛んでいく。
あんな無防備な姿の子にあの攻撃とは。
しかし、そんな心配は一切無用だった。

その光がその少女に届く前にルウの背後に移動していた。
羽も生えていない姿で、武器も持たずに。

「乱衝雨！」

今度は地面から氷柱状の白い矢が無数にその少女目掛けて飛んでいく。

が、それも防がれてしまった。

よく見えなかったが恐らく素手で殴っていたように見える。

「よそ見しちゃあいけねえよなあ？」

と、声のするほうには再び短剣。

しかしそれもすぐに視界から消え、リクが元いた場所には渦巻きのように炎が飛んできた。

もう超人对決になってるぞ？
これ。

「お前は早く神の元へ行つてカップを救つて来い。我らは大丈夫だ」
アレストはそう言いながら大剣を振り回している。
どこにそんな力があるんだよ。

大体、どこに行けばいいんだ？

「ゆうくんの直感で大丈夫！ こいつらは潰してしまいますから」
直感つて。

つてか潰すつて言いましたよね？ ルウさん？
この二人が負けると言うのも考えにくいが相手も相手だ。
今までとは違う。

それにまだ天光とか言うナンバー1はいるんだろ？

「いかせないつてば」

ふと、俺の近くで声がしたかと思うと足元から足が伸びてきた。
鈍い音が響く。

その音は俺の体に何かが直撃した音ではなかったが、鎌や剣の音でもなかった。

「っ……ルウ！！」

俺の足元から伸びてきた足は少女の物で、その蹴りから体を張って守ってくれたルウは俺に覆いかぶさるように倒れてしまった。

「あれえ？ わざわざ自分が盾になるの？ 変な死神のおねえちゃ

んだね。こんなカップくらい死んでも容量としては使えるのに」

その少女はそう言うのと体を思いつきり捻って回転蹴り。
こいつの戦い方は肉弾戦。

武術家とでも言うもんだろう。

で、その回転蹴りは俺目掛けて飛んでくる。
避ける避けないより、見えない。

しかし、その蹴りも俺には届かなかった。

その少女を何かが吹っ飛ばした。

俺の上に覆いかぶさっていたルウがその少女を蹴り飛ばした。
もう何が何だか良く分からない。

近くではアレストとリクが戦っている音が聞こえる。

「私、ゆうくんを守るためなら何でもするけど。あなたみたいなのに負けることは出来ないの」

俺の目の前に立ちふさがっているルウ。

そして吹っ飛んでいった方向で平然とした顔で立っているその少女。
どっちも無傷……なのか？

「ふうん。おねえちゃんそのカップ好きなんだ。変なの。それと、
あなたじゃないから。私はナユ。踏舞とつふのナユ」

このままじゃ俺が狙われる。
それだったら……。

「右手を胸に……目を閉じて……」

あとは鎌を出そうとする。

出る。いいぞ。

胸から離れた手に握られているのはルウの鎌。
そしてこの前はもてなかつたが、今はこの石がある。
何か力が湧く感じで、片手で鎌を持つ事が出来る。
こんな便利な物があるなら最初から渡してくれ。
マジで。

踏舞のナユと緑陰のリク。

この二人を倒してもまだナンバー1はいるんだ。
こんな所で時間はかけてられない。

俺にも戦えるって言うならやってやるさ。
死なない程度にな。

13：格の違い

鎌を握る手が汗ばむ。

アレストが辺りを火の海にしたこともあるが、異様に汗がでてる。いくら俺が鎌を握っているとはいえ、戦闘経験ゼロ、運動音痴な俺に何ができるのか。

適当に振り回す……しかないな。

目の前には聖人界ナンバー2になった少女、そしてその奥ではリクがアレストと戦っている。

いくら戦争でもこんな光景はもう二度と見れないだろう。てか見たくねえ。

「あなたもやる気？　悪いけど遊んであげる余裕は無いんだよ。じや」

そこまで言つとナユはもう俺の目の前。

こいつら移動速度の限界無いんじゃないのか？

「くっ、くるなあ……！」

もうこうなりややけくそだ。

適当に鎌を振る。

これしかないだろ、この状況。

「はっ……」

そんな声が聞こえたのは俺が鎌を振り落とした直後だった。

俺が振り落とした鎌から何か出た。

よく分からないけど青白い光が飛んでいき、通過した後には跡形も無く前方の景色が無くなっていた。

ルウは上空に飛んでいて驚いた表情、ナユはどうにかかわしたように地面に座り込んでいた。

はて、俺どうした？

ルウがこの鎌を使つてたときはあんなの出無かったよな。

「ここまで早いなんて……」

俺の横に舞い降りたルウは今まで見たどの表情よりも驚きが現れていた。

早いつて何が？

「ゆうくんのデータ転送量。そのブートストーンはその人の容量を力とかに変換して使うことが出来る物なんだけど、それを変換するのには時間が必要でより変換が早いほど大きな力が出せるの。これは個人差があるんだけどゆうくんはこの速度も優秀だったって事。凄すぎるよ」

なんか褒められすぎな気がしたが、これなら少しは戦えるんじゃないか？

自分で自分が怖くなってきたね。うん。

「ゆうくんは早く恵美さんの所へ。きつと、この建物の最上階だよ。さつきからこの二人が守ろうとしているのはそこだから」

そういえば確かに二人とも、特にリクは派手に攻められているように見えるがそれを上手くかわしつつそこへは近づけないようにして戦っていた。

「でもナンバー1はそこにいるんじゃない？」

天光とアレストが呼んでいた奴はまだ出てきていないし、リクは神の場所にいると言っていた。

神の場所は恵美がいる場所だろうし、俺が行っても逆に容量として捕らえられるだけでどうしようもないんじゃない？

「そこに着く前に追いつきますよ。あつちはナンバー2と3。こっちはトップ2ですから。任せてください！」

何時間か前に見たけどすごい久しぶりに見た気がするルウの笑顔。ま、負けないよな。

問題はどうかやって俺がそこに行くかな。

この二人はそこへ行かせないためにこうやっているわけだろうし、最初から本気で戦う気はないのだろう。

「くそお！」

と、ナユが俺のほうへ繰り出してきた拳は俺の目の前で止まった。小さな少女の腕を握っているルウは先ほどの笑顔を忘れてしまったかのような冷酷な顔で

「もう十分遊んだよね。錠」

その言葉がルウの口から出た瞬間ルウの鎌がルウの手を離れ空中へ舞い上がり、大量の紺色の雨がナユの周りにだけ降り注いだ。

その雨の一つ一つは全て矢のようにナユの体に襲い掛かる。

逃げようにもルウに掴まれている腕が離れない。

雨はルウだけを避けるように降っていて、徐々にナユの体が薄く、

半透明になっていった。

「私の負けか。やっぱ噂どおり強いや。紺碧のルウ……」

そう言うとナユはゆっくりと消えていつてしまった。

ルウの手から細い腕が完全に消えたとき、その雨も降り止んだ。

そんな様子を見ていると横で大きな火柱が上がった。

その火柱のすぐ横に立っているのはアレスト。

中には人影が見える。

「我を見くびりすぎではないのか？ 緑陰よ」

火柱が一瞬で消えると中には既に服は燃え、ぼろぼろになったリクの姿。

体中から見覚えのある文字列が浮かんでいる。

あれは確か……。

「耐火の印か。リクも考えたけど、アレストの業火を完全に防ぐには足りないよ」

俺の背中にも耐火の印がある。

ルウが俺に渡してくれたものだ。

ルウは俺のそばまで歩いてくると座り込んでしまった。

「今のちよつと疲れちゃうんだ……ははっ。ごめんなさい」

いやいや、謝らなくても。

聖人界と死神界のナンバー2対決は死神界の圧勝か。

それでアレストは死神界ナンバー1、リクは聖人界ナンバー3。

実力の差もあるだろう。

「耐火の印で我の攻撃を防ごうとするのは良い案だが、それはあくまで自身の体を炎のみから守るもの」

そう言うのアレストの大剣が一瞬で黄色くなった。

バチバチと剣が電気を帯びている。

アレストの属性は炎なんじゃ？

「あの剣はノンアロンマイドって言う特殊な剣で好きな属性にいつでも変えることが出来るの。今は……雷だね」

ルウはゆつくりと深呼吸をして俺の手を掴んだ。

そのまま俺を抱きかかえる。

再びお姫様抱っこ状態な俺。
結構恥ずかしい。

「アレストは大丈夫。先に行きましょう」

しっかりと掴まってくださいな。

そう言うルウは大きく翼を羽ばたかせ宙へ浮いた。

俺たちが進む方向から地面へ雷が落ちていく。

これもアレストの攻撃なんだろうか。

空気を振動させビリビリと音が響いている。

空はいつの間にか真っ暗。

俺はただルウにしがみ付いているしかなかった。

と、上昇するのが終わり俺たちはその建物の一室に侵入した。

最上階の窓を割って中に。

その部屋は真っ黒な壁に青い照明。

明らかに妖しい。

そして俺たちの正面にそれはいた。

四角い透明の巨大な箱が宙に浮いていて、中には熊のような大きな獣。

眠っているように動かないその熊もどきはなにが特別なオーラを放っていて、嫌な予感がした。

こいつが神……なのか？

そしてもうひとつ、その箱の隅っこに見慣れた制服の少女が一人。見つけた。

そこにいたのは紛れも無くクラスメートの恵美だった。

14：空よりも遠くへ

青い照明に照らされているその透明の箱の中に熊のような化け物と恵美が入っていた。

この状況でどうするかと言われても、俺の頭ではあの箱を壊すぐらいしか選択肢が浮かばない。不器用と言われようがかまわないさ。手に持った鎌を思いっきりその箱のほうへ振りぬく。

青白い光がその箱目掛けて飛んでいくのは見えた。

ただ、横から細い一筋の黄色い光がその青白い光を貫いた。

すると俺の攻撃は一瞬で何も無かったかのように消えてしまった。

「天光……だね」

ルウが俺の前に立って鎌を構えている。

今の攻撃がそいつの物だとしたら、この部屋のどこかにいるのは間違いない。

「僕の宝物に触らないでくれるかなあ？ もう」

と、箱の目の前に一人の少年が立っていた。

あれ？ 確かリクは爺さんとか言ってたような？

「うーんと……紺碧のお嬢さんに……ぬ？ ぬぬぬ？？」

その少年はおかっぱヘアで、眼鏡をしていて普通の子供のように見えた。

背も低いし、何となく嫌だ。

「まっ、まさかあつ！！ そこにいるのがあ！ 噂の大容量記憶媒

体のカップ？
」

こいつ……本当に天光とか言う奴なのか？
なんか弱そうだし、爺さんじゃないし、正直うざい。

「ゆうくん、油断しないで。彼が天光のバル。聖人界ナンバー1で、
106歳。外見の成長が著しく遅いみたいけど」

は？

106？

そりゃ爺さんだな。

じゃなくて、こんな奴がナンバー1なのか？

ナユヤリクよりも強い聖人界のボス。

それがこのおかつば眼鏡？

「ほっ……欲しい！ 僕のコスプレコレクションと引き換えにしても」

「おらっ！！
」

俺の体が反射的に動いた。

再び青白い光がおかつば眼鏡の方へ飛んでいく。

が、その光が直撃する寸前で何か壁のような物がその光を弾いた。

そのおかつば眼鏡の前には透明の壁があって、それによって俺の攻撃は防がれてしまった。

「すっ、素晴らしい速度だ！ 是非とも僕のコレクションに……
いや、神を復活させる器には君こそが適任だ！ ああ、なんと麗しい」

「斜^{しゃ}巖^{がん}」

と、そんな言葉をルウが口にするとおかつば眼鏡を囲むように12本の矢が時計のように現れた。

「発」

一斉にその矢がおかつば眼鏡目掛けて飛んでいく。
が、それもおかつば眼鏡に触れる前に溶けるように消滅してしまっ
た。

「手加減してくれてるのかい？ 随分とやさしい攻撃じゃないか？
紺碧のおー」

「驟^{しゅう}雨^う」

おかつば眼鏡の上空に何百もの光の鎌が現れる。
そしてそれが一気におかつば眼鏡に。
しかしそれもおかつば眼鏡に触れる前に消えてしまう。

「人の話は最後まで聞くものだよ。僕の気分は今絶好調なんだ。…
でも成長したね。何年か前に会った君は僕と地獄の業火を除けば
無敵だった。だけど攻撃方法はいつも近距離で遠隔攻撃は出来な
かったのに。立派に成長したって事だねえ。心も体もー」

「たあっ！！」

ガラスが割れるような音が響く。
おかつば眼鏡の前まで一瞬で移動したルウはその鎌で直接そいつの
前にあった透明の壁を斬りつけたのだ。

「そうそう。そうこなくちゃつまらないよお。ふふっ、紺碧か」

と、おかつは眼鏡の右手に杖のような物が現れた。
その杖から渦のように突風が吹き出てきた。

「きゃっ！」

俺のところまで吹き飛ばされたルウ。

俺の場所は避けるように突風は吹いていたために俺にはそよ風ぐらいしか当たらなかった。

「はあっはっは！ きゃっだつてさ！ 僕の傑作コレクションに加えようかあ。その前に、そこの麗しの少年を僕の神の器にしなきゃね」

こいつ相当うざったいけど強い。

何なんだよ。

「死んでもらっても容量としては使えるし、苦しんでもがく姿をじっくり眺めるのも悪くないよね。僕の心臓がバクバクしちゃうよお」

こんな奴に殺されるのは断固拒否だ。

絶対いやだ。

恵美を助けなきゃいけないし、ここで殺されるわけにはいかない。

「錠！」

ルウは俺の前に立ち再び攻撃を仕掛ける。
さっきナユを倒したときと同じように紺色の雨がおかつは眼鏡に降

り注ぐ。

「アクアフォームズ！」

と、そんな雨を防ぐようにおかつぱ眼鏡の上に水色のスライムのよ
うな物体が広がっていき傘の役目を果たしていた。

こいつは魔法使いか何かか？

「僕に単身で向かってくるなんて変なのっ！　もうそろそろ紺碧の
お嬢さんは死んで雨になってもらおうかな」

おかつぱ眼鏡は杖を自分の前に掲げ何かを呟いている。
止めなきゃまずい予感がする。
つてかまずいだろ。

「ばいばい」

俺の鎌を振る動作よりも早く杖から黄色い一筋の光がルウ目掛けて
放たれた。

さっきと同じその光は目にも留まらぬ速さでルウに近づいていく。
くっそ……。

と、地面からその光を巻き込むように火柱が上がった。

この火柱は……。

「我が来るまで待つという考えは無かったのか。馬鹿者」

その火柱の中から現れたのは死神界のナンバー1。
地獄の業火のアレスト。

「アレスト……」

ルウはその光が飛んでくる方向に鎌を構え盾のようにしていた。
あの速度でも反応は出来るってことか。

「緑陰のほうは片付けておいた。伝言も預かったぞ」

大剣を軽々片手で持っておかっぱ眼鏡のほうへ向けているアレスト。
そして体勢を立て直したルウ。

「負けんなよ。そう伝えろと言われた」

リクのその言葉はルウに対してだろう。

敵とは言ってもやつぱり友達だったんだろうな。

「……アレスト、私は負けないよ。負けるわけにはいかない！」

死神界のトップ2。

この二人は本当に頼りになる。

「ぼつ……僕に勝つ気なの？ 本気で？ ふ……ははははあつ
！ 冗談もほどほどにしなよ。僕は天光だよ？ 聖人界ナンバー1
の天光のバル」

「知っている。我も今一度自己紹介しておくか？ 地獄の業火アレ
スト」

この二人が両界のナンバー1。
それに死神界ナンバー2のルウ。
おまけに俺。

いくら聖人界ナンバー1でもこれはきついんじゃないのか？

「君たちは僕に対決を挑もうとしているんだね？ もう今更謝ったって許してあげないよ？ 僕は……これから完璧になるんだからねっ！！」

そう言うത്そいつは一瞬で箱の上まで移動して中に入った。

「僕は神と融合するよ。君たちのような雑魚が束になっても神には勝てないさ！ ははっ……はははははははあっ！！！」

「な……ちよつと待て！」

アレストの静止も気にせずこそいつは箱の中で光り始めた。

おいおい……ちよつと待てよ？

恵美がまだあの中にいるんだぞ？

それにあの神は不完全なんじゃ？

「あのままじゃ不完全な神と融合して手のつけられない化け物が生まれてしまう！ あいつ……自分の神が不完全だと気づいていないのか？」

アレストがその箱目掛けて炎の渦巻きを発射する。

しかしその炎ですら箱に届く前にかき消されてしまった。

「外へ！」

ルウに手を引かれ俺たちは入ってきた窓から外へ。

俺はルウに手を握られているだけで宙を舞っている。

めっちゃくちゃ怖いんだが。

ルウもそんな抱きかかえる時間は無かったし、しょうがないか。

俺たちが地面に足を着けた時、その建物が一瞬で黒くなりそのまま消えてしまった。

そして辺りの音が全て消えた。

全くの無音の世界。

俺とルウ、アレストの発する音以外は何も音がしない。

そして今までに何回か見た光景が広がった。

あたり一面紫色の空間。

亜空間だ。今まで聖人が襲ってきたときに出来た空間と同じ。

そしてそこにいたのはとてつもない大きさの熊のような化け物。

そして心臓部分には……

「恵美っ！！」

心臓の部分は透けていて、その中に恵美はいた。

心臓の役割かよ……。

こんな化け物の。

「グウルウラアアアアアア！！！！！！」

恐ろしい叫び声がこだまする。

これが、神？

「不完全なまま融合したせいで理性を保てていないんだ。早く倒さねば！」

そう言うのアレストは地面から炎の火柱を上げる。

その火柱はみるみる神を飲み込み、姿が見えなくなった。

やっ た か ……？

と、そんな考えは甘かったようだ。

火柱を気にもせず、にそいつの足が見え、手が見え、やがて全身が見えた。

燃えた形跡すらない。

「驟雨！」

上空に光が集まる。

ルウは上空へ飛んでいき、そこから鎌を振り落とすようにそいつに突っ込んでいった。
無数の光とともに。

バシユっという音とともに、そいつの体に傷がつく。
しかしそれは傷がたっただけ。
たいしたダメージは与えられていないようだ。

「やっぱり簡単にはいかないか……」

その化け物は攻撃を仕掛けてくるわけでもなく、ただその場に立ち尽くしているだけだった。

なんだ？

「容量を喰っているのだ。あのカップの容量を最大まで自らに取り組もうとしている。そうなれば少なくともあのカップは死ぬ。我らとて生きていられるかどうか……」

見ると恵美がいる場所から少しずつ光が漏れている。
んなこと言われてもどうすりゃいいんだよ？

「二人で、まあお前も入れて三人で一斉に攻撃を仕掛けてみると言うのもいいかもしれんな。あのカップの部分だけ取り出せれば奴はもはや抜け殻も同然」

つまり恵美をあそこから助け出せれば勝ちなんだな。

目標は分かりやすくていいじゃん。
ただ

「ルウの攻撃でも傷しかつかないっていうのが」

その傷も浅いようで到底斬るには及ばない。

「だから私たちの攻撃を同時に当てるんですよ。ゆうくんもね」

とにかく反撃もしてこない今がチャンスだな。

その化け物は神と呼ぶにはあまりにもふさわしくない。

おかつば眼鏡と融合してただでかくなっただけじゃねえかよ。
そんな奴に恵美を渡せるか！

「狙うのはあのカップの左側、体の中心部だ。いくぞ！」

アレストの合図とともに俺たちは同時に攻撃を仕掛けた。

俺は鎌を振りぬき飛んでいく青白い光。

ルウは空中から飛んでいく無数の光、アレストは炎の渦巻き。
三つの攻撃がその化け物目掛けて飛んでいく。

すさまじい爆音が響いた。

恐らく攻撃が当たった音だろう。

煙が舞っていて姿が確認できない。

やったか？

恵美は……？

ルウが羽ばたき、煙を払って見えたその姿はまさに手ごたえはありという印象を与えるには十分だった。

その化け物の左手が吹き飛んでいた。

どうにか左手で防いだというところだろう。

もと左手があつた場所からはおびただしい量の血が流れている。

辺りに悲痛な叫び声上がり、そいつは目を開きこちらを睨んだ。

赤く、鈍く光るその眼は神というよりも悪魔のようで、背筋が凍るとはこのことだろう。

でも……。

この攻撃を続ければ勝てる。

そんな自身がどこからか沸いてきた。

「危ないっ！」

そんなルウの声が聞こえたのは俺の体に何かが巻きついた直後で、俺はすぐに自分の状況が理解できなかった。

体に巻きついてるのは光で出来たような鎖。

びくとも動けないまま俺の体が自然とその化け物のほうへ近づいていく。

その化け物は俺の体を……いや、容量を使つて完全な神になる気だろう。

徐々に徐々に近づいていく。

ルウやアレストが必死に鎖を解こうとしているのが分かるが、全てきかない。

俺の意識もだんだんと遠のいてきた。

くっそ……。ここで負けられるかよ……。もう少しまつに勝てそうだったのに……。恵美を助け助け……。るーるー

「グギヤアアアウルアア！！！！」

そんな叫び声で意識が戻ると俺の体を縛り付けていた鎖は消え、俺は地面へと急降下している。

落ちていく間に見えたのはその化け物の目に何か葉っぱのような物が刺さっていることと、見覚えのある白いオーバーコート。

そして落ちている間に俺を受け止めたのは懐かしいような感触。

「ゆうくん！！ ゆうゆうくんっ！！！！」

「ども」

俺を抱きかかえているルウは軽く泣き顔。

初めて会ったときもこんな感じで抱きかかえられていたよな。

で、俺はどうなってたんだ？ あの化け物は？

「負けんなって伝言はちゃんと伝わってんのか？ ったく……何で俺が」

そこにいる白いオーバーコートの男は聖人界の元ナンバー2。
何でここに？？

「我が生かしておいた。どの道この戦争の復興作業が必要なのだ。
その為には聖人側の代表が一人は必要であろう？ こいつは生かしておいても我らに害は与えられないしな」

「なめんな！ 俺だってお前にかすり傷ぐらいは……」

「耐火の印を装備し、私の攻撃を全てかわせない男が言う言葉か」

おいおい。

それよりもお前は神側の立場なんじゃないのか？

「まあ立場的にはそうだけども、あんな不完全な化け物に聖人側の領域荒らされちまったら復興も面倒だろ？　だったら暴れる前に潰してやるよ」

「リクで役に立つかなあ？」

ルウは呆れるような表情でぽつりと。
それでも頼りにはなりそうだけど。

「今助けたのも俺だろうが！　今のはあいつの眼力なんだよ！　だから眼を潰せばいいんだっつうの。それも分からないでゆうくん、ゆうくんって泣きじゃくってたお嬢さんは誰かな？　ええ？」

「リク……せつかくアレストが殺さないでおいでくれたのに私に殺されたいの？」

「いいからさっさとあいつを仕留めるぞ。痴話喧嘩は後でじっくりやってくれ。我とてこの化け物を眺めているのは歯痒いのでな」

と、化け物の方を見ると眼を潰され、左手を失い既にぼろぼろだった。

それでも恵美のいる場所から漏れている光は変わらない。
まだ容量を喰い続けてるって言うのかよ。
だったら早めに仕留めないとな。

「我の最大限の攻撃で仕留めてみせるか」

「俺だつていい加減負け戦は飽き飽きだぜ？　本気を出せばこんな奴―」

「ささつと潰しちゃお！　」

この三人ある意味息合つてゐるよな。

三人とも構えていたので俺も鎌をその化け物に向ける。

「いつけえ！！！！！！　」

俺の攻撃を合図にしたかのように三人の攻撃が後を追う。

青白い光と灼熱の炎、そこに緑色の粒が何百にも合わさつて飛んでいく。

そしてそこに数え切れないほど無数の光。

それら全てが神と呼ぶにはふさわしくない化け物目掛けて飛んでいく。

その攻撃はまるで滝のようにその化け物に直撃し、そのまま通過してしまつた。

そしてそこには化け物の姿は一欠けらも無く、見慣れた少女が一人寝転がっているだけ。

「恵美っ！　」

急いで駆け寄ると恵美は目を閉じぐったりとしている。

死んでないよな？　おい！

「気を失っているのと疲れがたまっているのだろっ。命に別状は無いようだ」

――これって俺たちが勝ったってことだよな？

「やった！ ゆうくん！ やったよ！」

そういうルウはもう完全に泣き顔で、目にはうつすらと涙を浮かべている。

俺の手をとりぴょんぴょん跳ね回っている。

「さてと、んじゃこいつら元の世界に戻すんだろ？」

と、リクの一言でルウの動きが止まった。

あつという小さな声を漏らし少しずつ顔から笑みが消えていく。

「どした？」

俺の問いかけにも俯くばかりで何だか場の空気が少しずつ暗くなり始めたような――

「これで我らの仕事は終わったのだ。つまりルウはこちらへ戻ることになる。そして、お前らを人間界に帰した後に我が忘却の炎を人間界全域に吹きつけ我らに関する情報は全て消し去る。無論お前のも」

つてことは……俺はこの一連の事を忘れるってことか？
ルウに会った事も、こうして化け物を退治したことも。

「まあそくなるわけだな。しょうがねえさ。だってお前が誰かにこのことを話でもすりゃ一応広まっちゃうわけだろ？ 一応それは避けておかねえとなあ」

俺はそんな広めないし。

「まあそう言うけどよ、一応これ義務らしいぜ。こっちの世界のことは知られちゃまずいんだよ」

「心配はいらん。私の忘却の炎は熱くもないし痛くもない。人間界に与える損失はゼロだ」

俺の記憶が損失だ。

「ゆうくん……ーん？ あっ」

そう言うところまではちょっと待っててと二人に言い残し俺を連れて少し二人から遠ざかった。

「ちょっと、どうした？」

「ゆうくん。よく聞いてね。私はゆうくんのこと忘れないね。で、アレストのは忘却の炎、ほのおだからね。私のこと忘れないで」

そう言うのと再びもとの場所まで戻ってきた。

炎？ ほのお？

「さて、あまり時間も無いようだね。早く人間界に返さねばその力ツプが死んでしまう」

「やれやれ、俺は聖人側の後片付けかよ……何の罰ゲームだ？ こりゃ？」

と次の瞬間には俺と恵美のいる地面が白くなり光りだした。

「それは転送の印だ。人間界の元いた場所までお前らを転送する。
……世話になった」

そう言いつと徐々に俺の体の下から消えていく。
体の色が徐々に薄くなっているのが分かる。

「ゆうくん！ またいつか会えるよ！ だから……だから私の事を
………れ………で………だ………き………」

そんなルウの声と笑顔と泣き顔が混ざったような表情を最後に俺は
意識を失った。
そして目が覚めると俺は自分の部屋のベッドの上に寝ていた。

「って、おい。マジかよ」

反射的に体を起こし窓の外を見てみると上空から赤い炎が空全体を
夕日のように覆い、一瞬で降り注いだ。
今のが忘却の炎か……？

「よお！」

見慣れた姿が目の前にいる。
中学からの腐れ縁の純。
こいつの顔も何となく懐かしい。

「どおした？ お前寝たかあ？」

お察しの通り寝てません。目が覚めててね。

その日の学校はいつもと変わりなく、変化があるのはルウがいないこと。

まあポーラは本当に転校していたことになっているけど。いつもは後ろにいた紺色の髪の少女が懐かしい。

「よっ！ なあんか浮かない顔だねえ〜元氣だしなよっ！ そりゃ勉強は私も嫌だけどさ」

と、聞きなれた声と鉛のような平手打ちが俺に襲い掛かったのは同時のことで、それが誰の物なのかは考えなくても分かる。

「恵美は元氣すぎるんだよっ〜いてえ」

あんな事件があつたことなんて一切覚えてもないし感じてもないように恵美は元氣そうにそこにいた。

まあ覚えていないのは忘却の炎の効果もあるんだろうけど。

誰一人ルウの事を覚えている人はいなかった。俺を除いてね。

なんで俺がルウの事も聖人も死神も覚えているかと言うのは俺の背中にあるもののおかげだった。

「耐火の印ねえ。ほんとに最後まで役に立っただな」

あの日窓の外からみた炎が俺を通り過ぎたときに俺の背中からなにかの文字列が現れてその炎を吸収してしまった。

その後その文字列は碎けて無くなってしまったけど。

ブートストーンも一切効果を發揮せずにただの石ころ同然になってしまった。

はて、何でだろう？

物をしまうことも取り出すことも出来ないし、鎌はあの時置いてきちゃったような気がする。

しまつてなかったし。

つまり俺が持っているのは石ころと記憶だけだ。

まあこの記憶は宝物だけど。

放課後、俺は一人であの交差点まで歩いてきた。

まあ下校に通る道だから当たり前って言えば当たり前だけど。

「こんな交差点からどう移動してるんだか」

月光の交差点と呼ばれていたここに来るとルウの事を思い出す。なんだかあつという間に過ぎてしまった時間のようで、思い出すたびに切なくなる。

で、家に帰ると珍しく母親が俺より早く家にいた。

何か不吉な予感がしたが。

「ゆうくん。お母さんね、ゆうくんの趣味が分からなくて何も買つてあげられなかったけどとりあえず分かったからこんな物買つて来ちゃった」

そういつて俺に見せてきたのはどこから持ってきたのかメイド服。俺……まだ夢かな？

「ゆうくんの趣味が女装だったなんてね……。あ、いいのよ恥ずかしがらないでも」

……俺社会的に抹消されそうだ。

なんでその記憶は消えてないんだよ？

こらアレスト！ もう一回俺の母親に満遍なく忘却の炎を吹き付けろ。

大体俺も忘れてたぞ！？

と、とりあえずそんな母をなだめて部屋に入る。

いつも通りの俺の部屋。

なのに何か寂しくて、物足りない。

つついベッドの中や下なんかを見てしまつが何も無い。

「ルウは元気にやってるかな」

そんな事を呟きながら俺は窓を開け空を眺める。

死神や聖人が死ぬと雨になるとルウは言った。

もしそれをそのまま考えたと聖人界や死神界は雲の向こう側にでもあるんじゃないだろうか？

鳥も、飛行機も届かないどこかに。

「また会えるよな。お互いに忘れない限り……さ」

雲は厚く空を覆っている。

でもいつか。

いつかこんな声が再び届くといいななんて俺は思っている。

あの空の向こう側に、いつか届け。

14：空よりも遠くへ（後書き）

始めましてもしくはお久しぶりです。

最後までお読みいただきありがとうございます。

過去最長となった今作では日常が非日常に変わるという話でした。

死神というのは私が想うファンタジーやSFの世界での英雄で好き
好んで死神は使います。

そんな死神も可愛いキャラにデフォルトしたりそんな可愛い死神が
恋しいキャラだったりしたらきつとこれはいいことに違いありませ
ん。

そんな確信を持っています。

本編は所々改変を済ませ確認してありますが万が一ご指摘等ござい
ましたらご報告いただければ幸いです。

それではまたの機会があれば。

零光

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6735b/>

紺碧の死神

2010年10月9日16時20分発行